松江市文化財調査報告書　第57集

文化財愛護
シンボルマーク

筆ノ尾横穴群発掘調査報告書

1995年1月

松　江　市　教　育　委　員　会
㈶松江市教育文化振興事業団

松江市文化財調査報告書　第57集

文化財愛護
シンボルマーク

筆ノ尾横穴群発掘調査報告書

1995年1月

松 江 市 教 育 委 員 会
㈶松江市教育文化振興事業団

筆ノ尾横穴群発掘調査報告書

1．本書は平成６年度において実施した長江簡易水道施設整備事業排水池造成工事にかかる筆ノ尾横穴群の発掘調査報告書である。

2．本発掘調査は松江市環境保全部環境保全課から松江市教育委員会が依頼を受け，財団法人松江市教育文化振興事業団が実施したものである。

3．調査の組織は下記のとおりである。

依頼者	松江市環境保全部	部　　長	廣江　壮亮
		環境保全課長	杉原　精訓
		簡易水道係長	舟木　耕治
		技　　師	岩田　光弘
主体者	松江市教育委員会事務局	教 育 長	諏訪　秀富
		生涯学習部長	中西　宏次
		文化課長	中林　　俊
		文化財係長	岡崎雄二郎
実施者	財団法人松江市教育文化振興事業団埋蔵文化財課		
		理 事 長	大塚　雄史
		事務局長	佐藤千代光
		調査係長	中尾　秀信
調査者		〃	〃

4．横穴墓の人骨の取り上げ及び鑑定は，鳥取大学医学部助教授井上晃孝先生に協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。

5．発掘調査の実施に当たっては，㈶松江市開発公社の協力を得た。

6．出土遺物は松江市教育委員会文化課で保管している。

7．遺物の実測及び写真撮影，執筆・編集は中尾が行った。

文化財愛護シンボルマークとは……

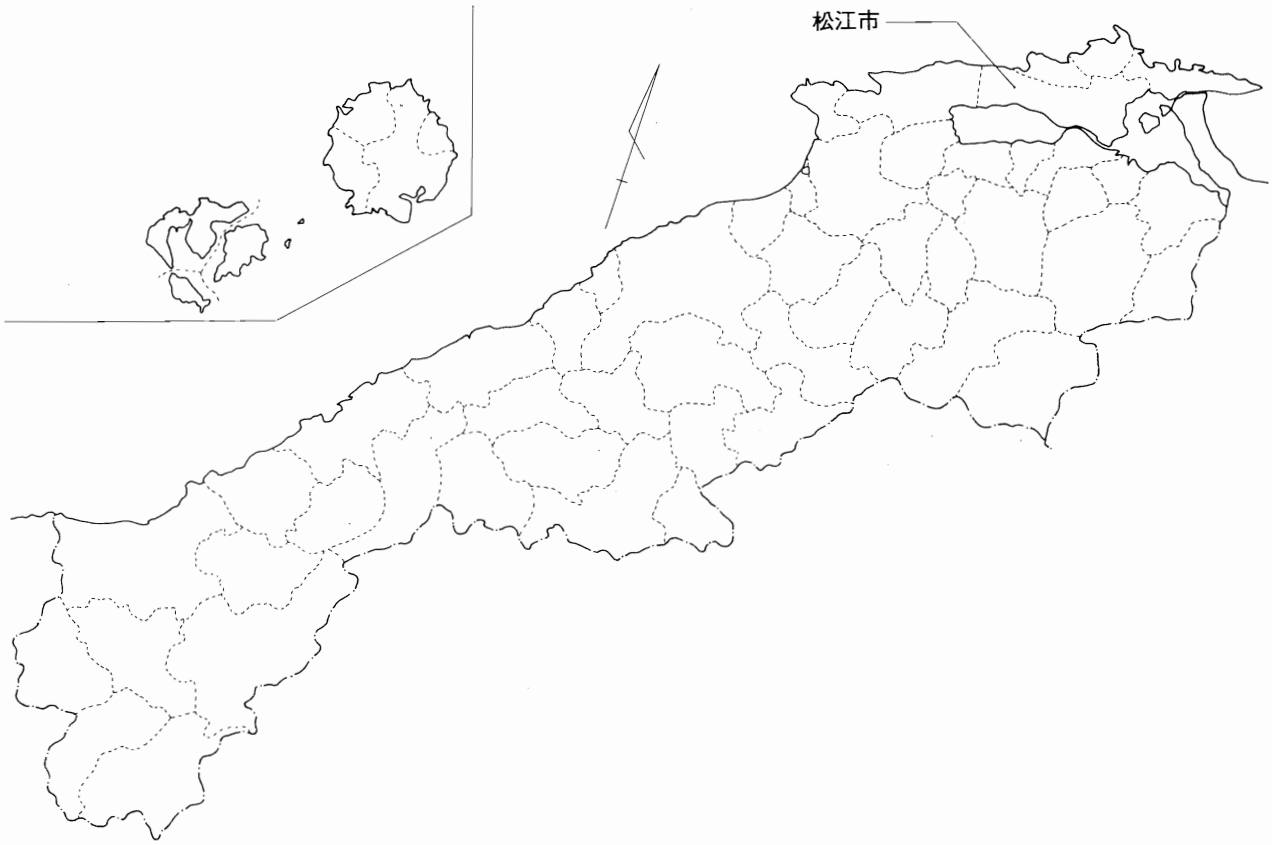
このマークは昭和41年５月26日に文化財保護委員会(現文化庁)が全国に公募し、決定した文化財愛護の運動を推進するためのシンボルマークです。

その意味するところは、左右にひろげた両手の掌が、日本建築の重要な要素である斗栱(ときょう)、すなわち斗(ます)と栱(ひじき)の組み合わせによって全体で軒を支える腕木の役をなす組物のイメージを表わし、これを三つ重ねることにより、文化財というみんなの遺産を過去・現在・未来にわたり永遠に伝承していこうというものです。

文化財愛護
シンボルマーク

目　　次

1．調査に至る経緯 …… 3
2．遺跡の位置と環境 …… 6
3．発掘調査の概要 …… 6
　1）第 1 号穴 …… 6
　2）第 2 号穴 …… 17
　3）第 3 号穴 …… 18
　4）第 4 号穴 …… 23
　5）第 5 号穴 …… 28
　6）第 6 号穴 …… 33
4．出土遺物の概要 …… 33
5．小　　結 …… 36
6．附　　編
　筆ノ尾横穴群出土人骨について
　鳥取大学医学部法医学教室　井 上 晃 孝 …… 39



第 1 図　松江市位置図

1．調査に至る経緯

松江市では平成２年度から市内湖北地区給水改善事業を実施中であり，その一環として平成５年度において「長江簡易水道施設整備事業」を策定し，その配水池造成工事を㈶松江市土地開発公社に委託され，平成５年８月から工事を実施することとなった。

そこで，平成５年７月２日付松開公第24号で，㈶松江市開発公社からその予定地内の埋蔵文化財の分布調査の依頼を受けたので，松江市教育委員会では平成５年７月16日に予定地の松江市東長江町筆ノ尾地内の山林8,170㎡の分布調査（現地踏査）を行ったが，予定地内は既に全伐採が終わり倒木の運び出し用の作業用道路がついており，至るところで山の地肌が見えるようになっていたのである。

現地踏査の結果，配水池タンク造成区域内につけられた作業用道路の周辺から，多数の須恵器が表採されたが，進入道路造成区域内では１片も表採できなかった。また横穴墓特有の凹形地形（横穴墓推定地）が配水池タンク造成区域内では15ヶ所，進入道路造成区域内では15ヶ所認められたが，この内，前者では５ヶ所，後者では２ヶ所が造成工事に支障がないことが分かった。

その後，当教育委員会文化課，松江市環境保全部環境保全課及び㈶松江市開発公社との三者で協議を行った結果，配水池タンク造成区域内では横穴墓特有の凹形地形（横穴墓推定地）や多数の須恵器が確認されたことから，試掘調査するまでもなく大規模な横穴群が存在することは確実と思われ，平成６年度に本格的な発掘調査（全面調査）を実施することになったが，正確な基数と調査費を算定するため平成５年度中に電気探査を実施して，科学的に横穴墓が何基所在するのか把握することになった。

第２図　調査地位置図

第３図　周辺の遺跡分布図

第１表　周辺の遺跡一覧

番号	名　　称	種　別	所　在　地	遺　構　・　遺　物
1	二つ山城	城　　跡	西長江町	山城
2	宗垣古墳	古　　墳	西長江町	円墳
3	要害山城跡	城　　跡	西長江町桜谷	
4	下垣古墳	古　　墳	西長江町下垣	円墳
5	塚さん古墳	古　　墳	西長江町下垣	横穴式石室
6	下垣井戸の上古墳	古　　墳	西長江町下垣	墳形不明（石室）
7	山崎古墳	古　　墳	西長江町山崎	須恵器片
8	岩屋古墳	古　　墳	西長江町岩屋	墳形不明（横穴式石室）
8	西長江地区条里遺跡	条 里 制	西長江町	須恵器片
10		古　　墳	西長江町	方墳（16×15）
11		古　　墳	西長江町	方墳（９×８）
12		古　　墳	西長江町	方墳（10×10）
13		古　　墳	西長江町	方墳（11×11）
14		古　　墳	西長江町	方墳（12×12）
15		古　　墳	西長江町	方墳（16×12）
16		古 墳 群	西長江町	方墳２基
17		古 墳 群	東長江町	方墳４基
18		古　　墳	東長江町	前方後円墳（36）
19	常楽寺瓦窯跡	窯　　跡	西長江町常楽寺	
20		散 布 地	西長江町	須恵器片
21		散 布 地	西長江町	土師器・須恵器片
22		散 布 地	西長江町	須恵器
23	西長江遺跡	散 布 地	西長江町	須恵器片
24	雲岸寺東古墳群	古 墳 群	秋鹿町雲岸寺	円墳２基
25	雲岸寺跡	寺 院 跡	秋鹿町	古式土師器片
26	雲岸寺古墳	古　　墳	秋鹿町雲岸寺	円墳（７）
27	井神谷東遺跡	散 布 地	秋鹿町	

一方進入道路造成区域内については，横穴墓特有の凹形地形は認められたが，横穴墓に伴う須恵器は１片も表採できなかったところから，事前に重機を併用た試掘調査を実施することになり，平成５年９月３日，９月６日，10月１日，11月８日に，該当する13ヶ所に９本のトレンチを入れて試掘調査を実施したが，９本のトレンチ共に表土の下は黄褐色土の地山であり須恵器等の遺物も１片も出土せず，この区域内には横穴墓は所在しないことが分かった。

この分布・試掘調査の結果について，平成６年２月４日付，教文第261号で㈶松江市開発公社理事長宛に回答すると共に「①平成６年度以降に配水地タンク造成区域内についての本格的な発掘調査（全面調査）が必要なこと。②その実施前の平成５年度中に電気探査が必要なこと。③この分布・試掘調査で確認された横穴墓群を筆ノ尾横穴群と命名すること。」を通知した。そして，平成６年２月４日付教文第78号で，島根県教育委員会教育長宛に㈶松江市開発公社理事長宛に回答したことを報告した。電気探査については平成６年１月26日から同年３月25日かけて，最も凹地の多い南側斜面を中心に，３m間隔で計16本の測線を設定して調査を行った結果，造成地内の４ヶ所で反応が認められた。発掘調査はこの電気探査の反応地点を中心としてトレンチを設定し，以後遺跡の状況により随時拡張していく方法をとった。現地調査期間は平成６年５月23日から同年11月18日までである。

2．遺跡の位置と環境

筆ノ尾横穴群の所在する丘陵周辺には岩屋古墳，山崎古墳，宗垣古墳，下垣古墳等，一辺10～16m前後の方墳が点在している。

山崎古墳は本横穴群の所在する丘陵の西側に所在し，ここでは須恵器片が採集されている。宗垣古墳は北側の丘陵にあり，一見したところ円墳状の古墳である。塚さん古墳・下垣井戸の上古墳・下垣古墳はその南側に所在し，前二例では石室が残されている。

さらに南には岩屋古墳がある。墳丘はすでに流失しているが，横穴式石室の石材や須恵器片が採集されている。

南に連なる丘陵には，８基の古墳が確認されている。大きいもので，一辺16m，小さいもので９ｍほどの方墳が丘陵尾根上300ｍほどの範囲に広がっている。この丘陵西側の谷沿いの平地には，西長江条里制遺跡と呼ばれる遺跡が記録されている。

こうしたことから推察すると，古墳時代には政治的或いは経済的な一つの集団を形成していたことがうかがえる。

ただ横穴墓については，これまで発見例が報告されていない。従って，筆ノ尾横穴墓群がこの地域では唯一の発掘調査例となる。

3．発掘調査の概要

筆ノ尾横穴群は，標高120ｍほどの丘陵の南側斜面に構築されており，幅約10ｍ，標高で80ｍから90ｍにかけて密集して段状に三段，６穴が構築されている。下段の２穴を西側から１号穴，２号穴と呼称し，最上段の東側の横穴を６号穴と呼称した。

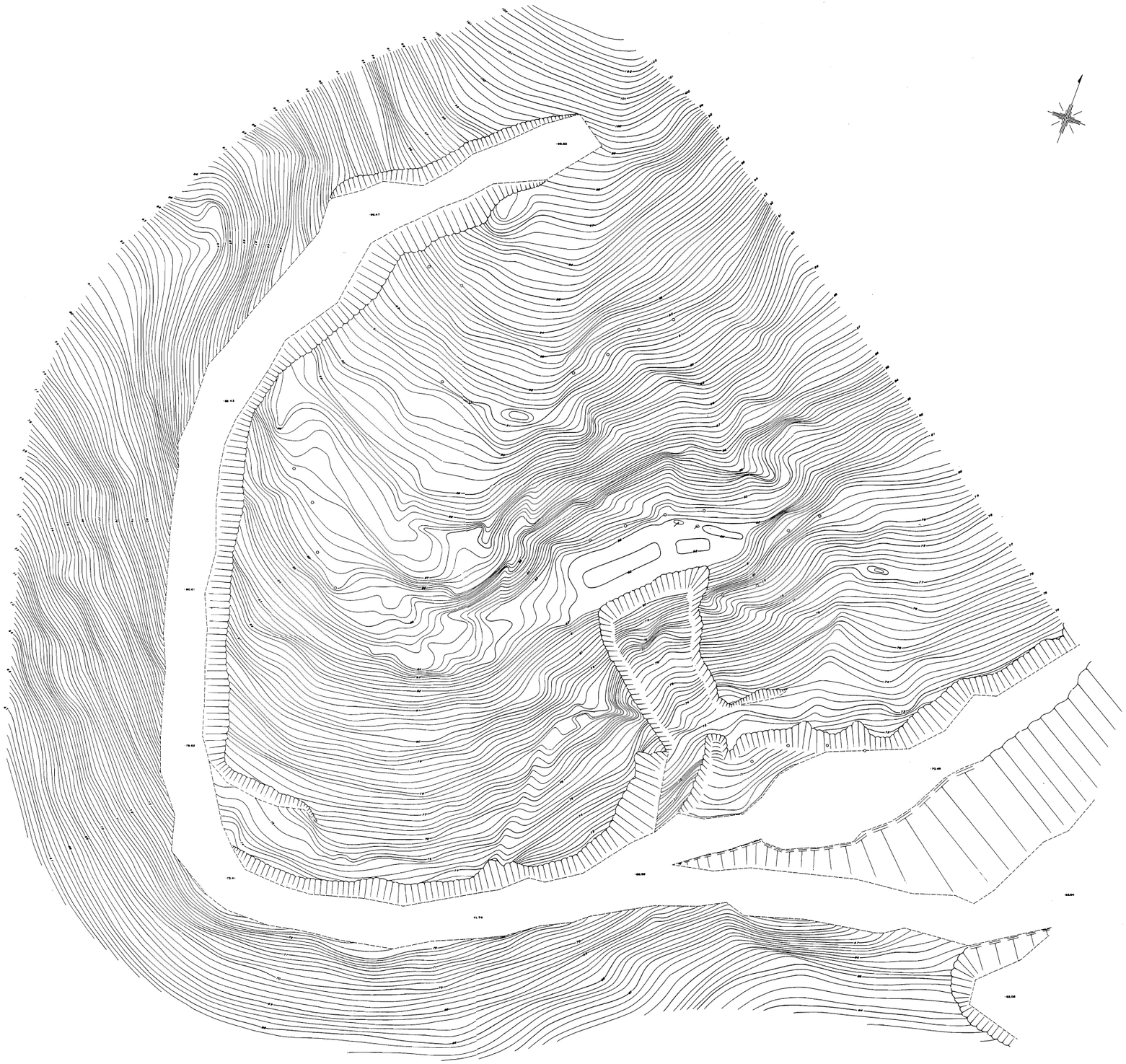
本横穴の所在する丘陵は土質が非常に脆く，調査中にも縦に剝離してボロボロと崩れていくということが頻繁に発生した。その為か１号穴の他は天井が落盤して完全に埋没していた。特に５号穴・６号穴は脆い岩盤で危険であった為，重機によって上面を削平して調査を行ったものである。

なお，工事計画の法面では６号穴の東側半分が削平されないことが判明したので，従って調査も出来なかったことをお断りしておく。

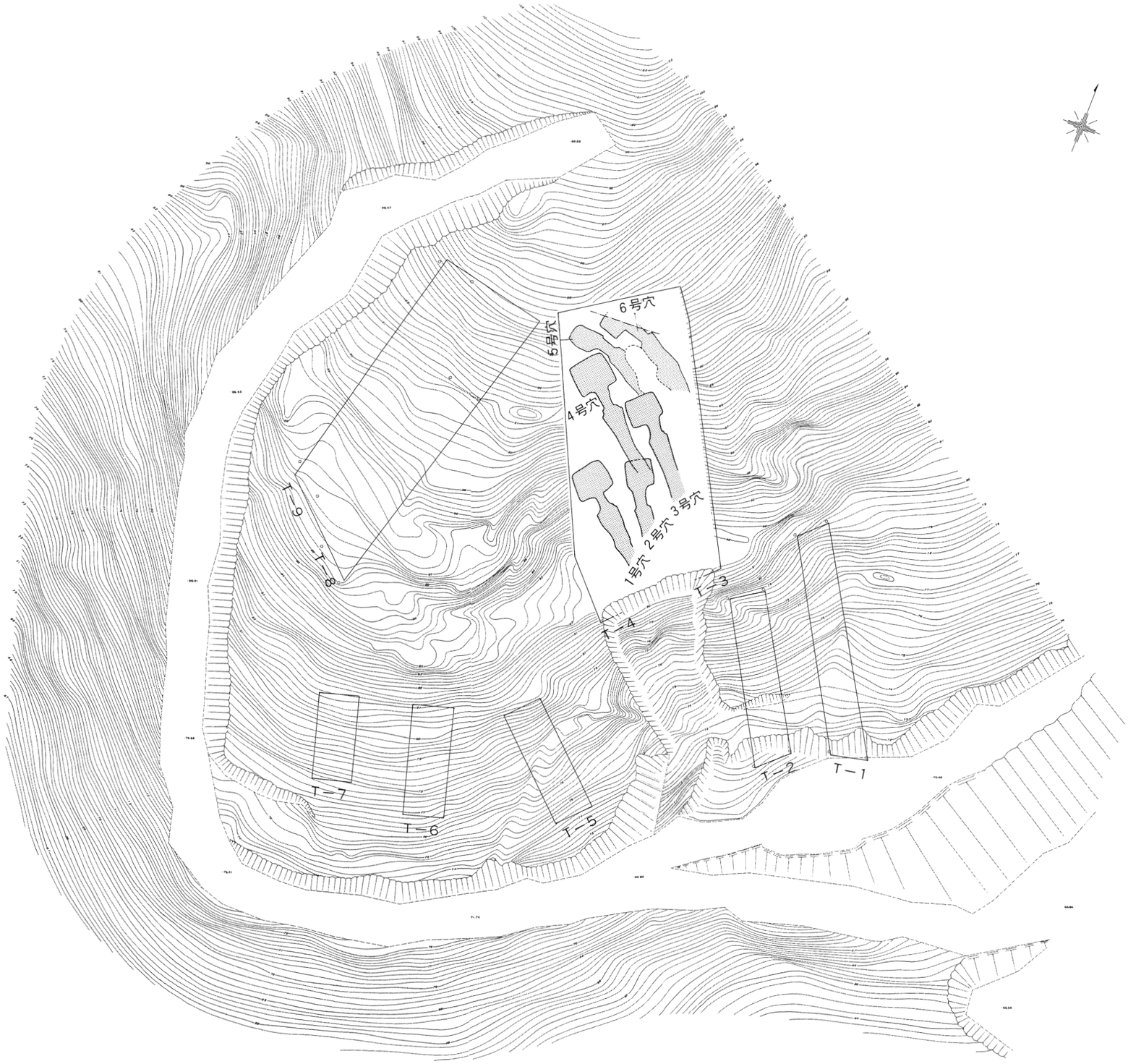
1） 第１号穴

玄室床面の奥壁部分の標高は81.25ｍである。発掘調査中に玄門側の天井が崩れて，内部が露出して発見された。前庭部の長さは残存4.70m，幅は掘り始めの部分で1.20m，羨門付近で1.68ｍを計る。閉塞には人頭大から50～60㎝までの石を使って，玄門を完全に埋めていた。その数100個以上に及ぶ。玄門は幅0.82m，高さ0.74m，羨道部の幅0.72m，長さ1.00ｍを計る。玄室は奥壁幅2.32m，玄門幅2.85ｍで高さは1.38ｍあり，丸天井型妻入りの横穴である。

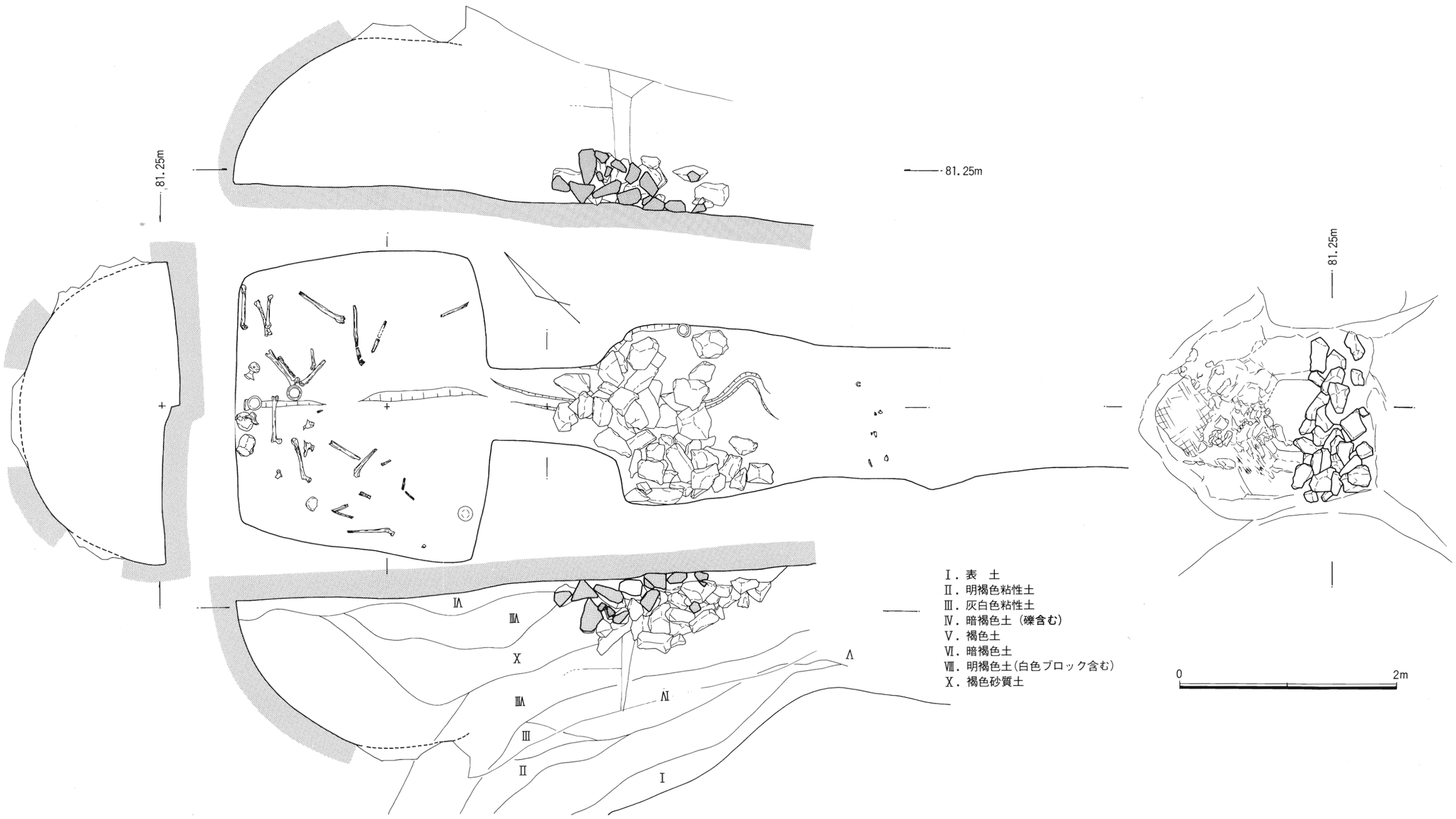
玄室内には，人骨が床面いっぱいに散乱していた。頭骨の残っているのは３体であるが，大腿骨や腓骨の数，遺存された位置や状態から，男性２人，女性２人＋２人が埋葬されているようである。人骨は寄せたり集骨したりした状況は無く，むしろ何かでかき混ぜたようにバラバラの状態で検出されており，埋葬された順序等の明確な状況は確認できなかった。



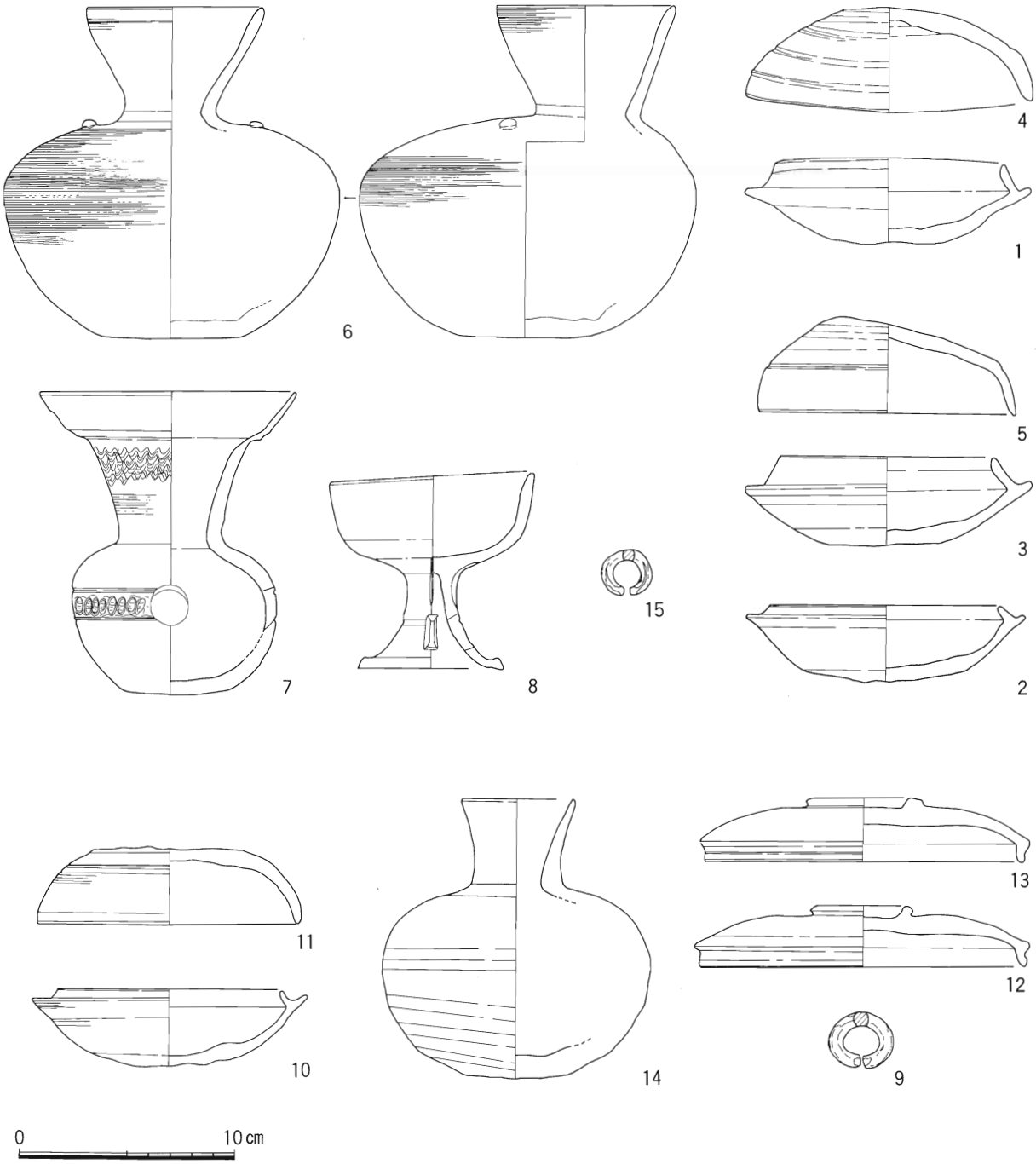
第４図　筆ノ尾横穴群調査前地形測量図



第５図　筆ノ尾横穴群調査成果図



第６図　筆ノ尾１号穴調査成果図

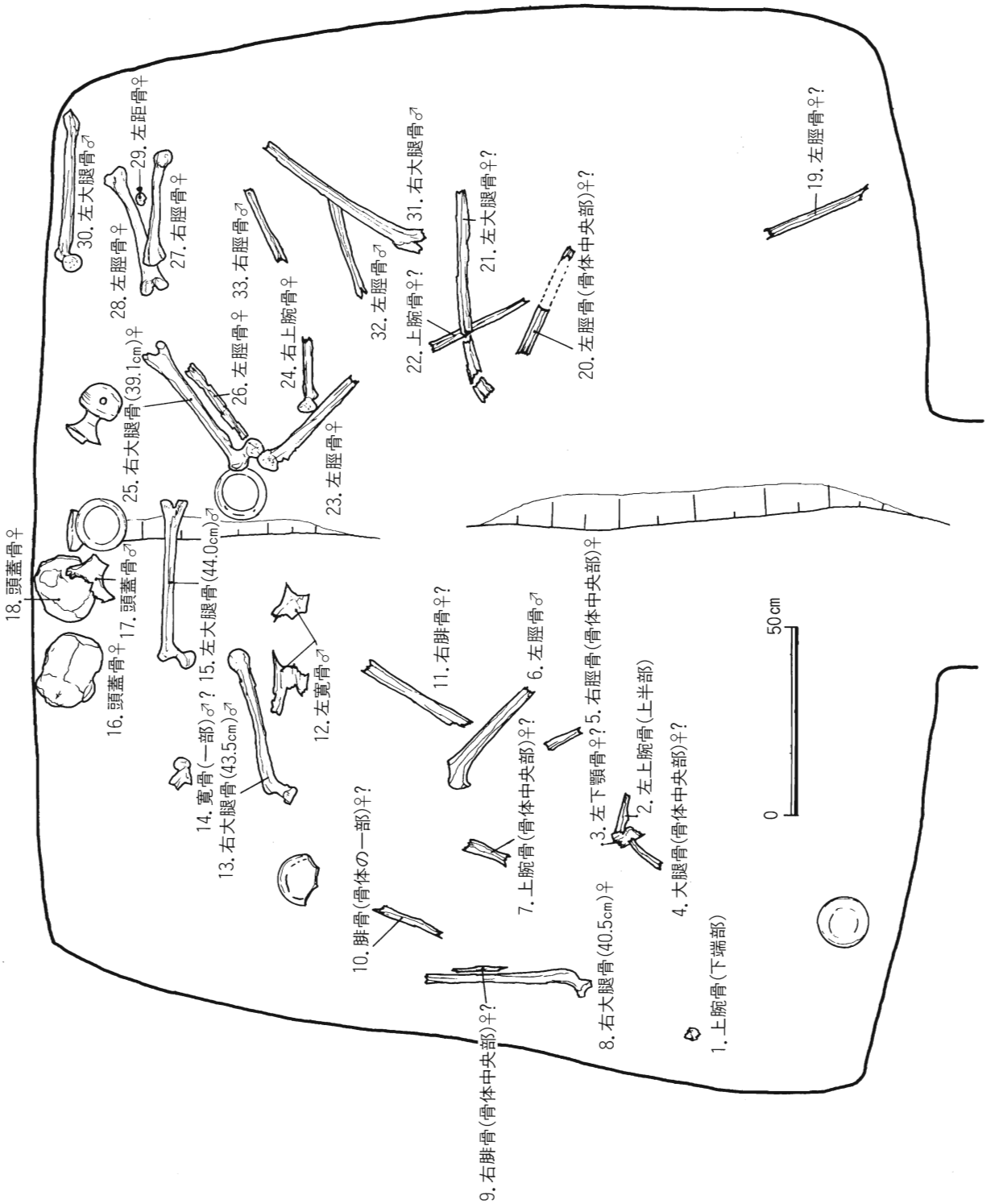


第７図　筆ノ尾１号穴出土遺物実測図

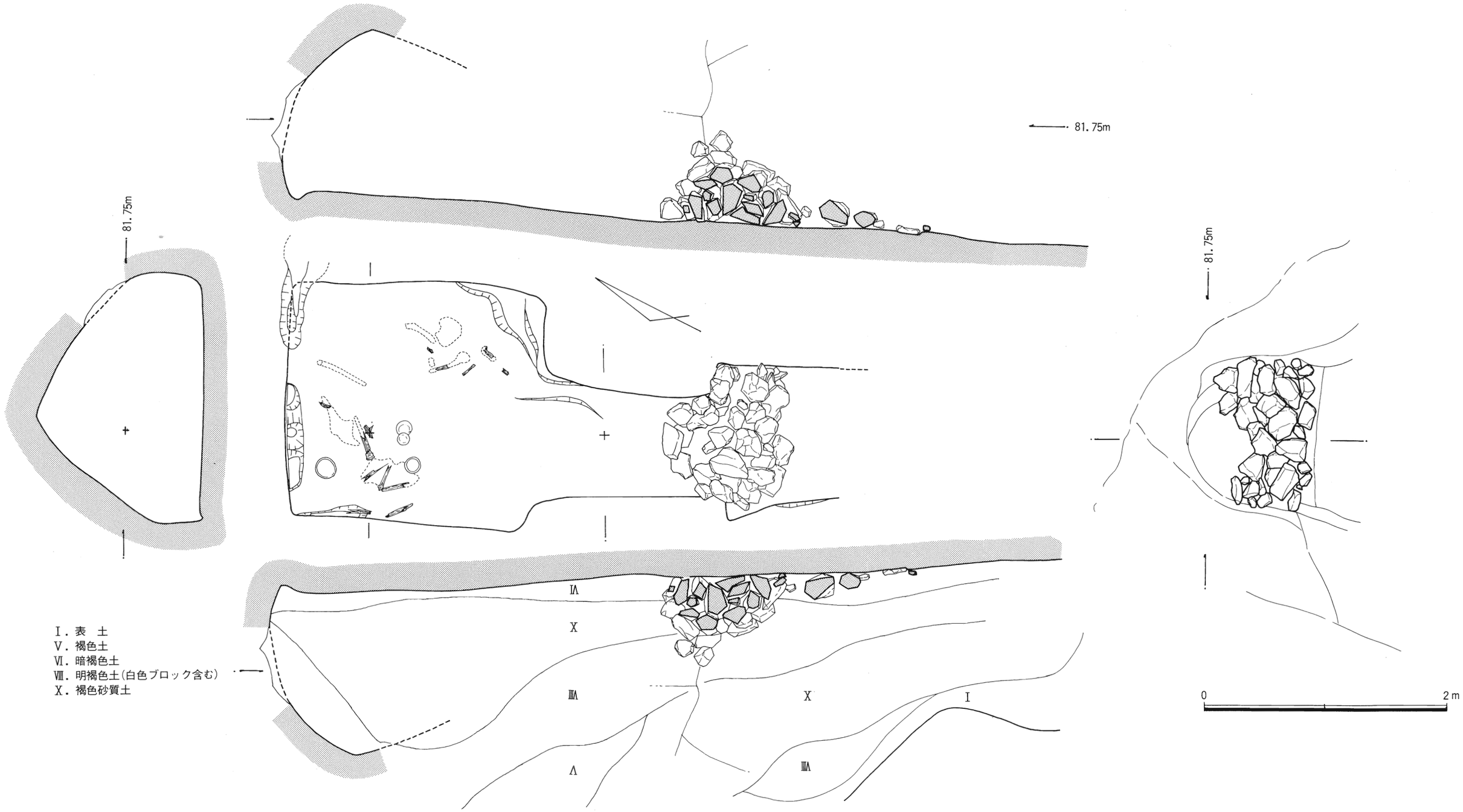
なお，現地での人骨の取り上げを，鳥取大学医学部法医学教室の井上晃孝先生に依頼し，その鑑定結果の詳細は附編において報告されている。

玄室床面の中央には，排水用とみられる幅10cmほどの溝が切られており，左右に屍床を作っている。左側の屍床床面は右側に比べてわずかに高く作られているようである。

遺物は前庭部で，輪状つまみの蓋２個（12・13），瓶１個（14），鍍銀環１個（15）があった。鍍銀環は銅芯の直径0.7cm，径3.0cmを計るもの。地山に接触した部分は腐食が進み，地金の銅が露出して



第8図　筆ノ尾1号穴人骨実測図(取り上げ時)



第９図　筆ノ尾２号穴調査成果図

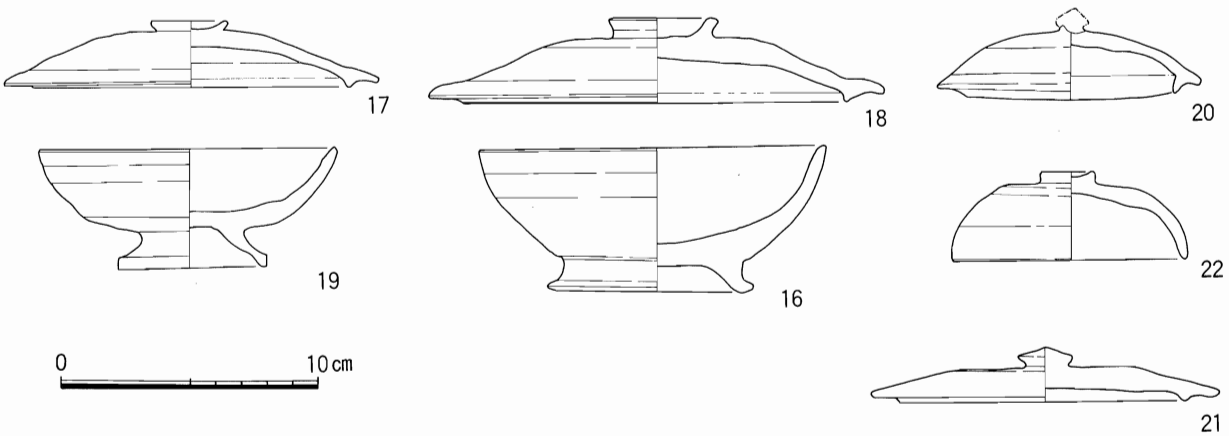
いる。前庭部のほぼ中程で検出されており，人為的に動かされ遺棄されたものであろう。羨門右側には須恵器の蓋坏が１セット（10・11）置かれていた。玄室内の床面には，坏身３個（１～３），坏蓋２個（４・５），瑯１個（7），平瓶１個（6），高坏１個（8），鍍銀環１個（9）があった。蓋坏にはわずかに削りの痕跡が認められる。平瓶は把手が径６㎜の円形を成すもので，高さは15.4㎝，胴部の最大径は15.7㎝ある。この鍍銀環は銅芯の直径0.5㎝，径2.5㎝。遺存状態も良い。前庭部で出土したものとでは，大きさが全く違うので，元々は玄室内に少なくとも２対あったものと思われる。

２）第２号穴

玄室床面の奥壁の標高は81.10m，前庭部の長さ2.75m，幅1.08m。玄門部は１号穴と同様に人頭大の石を詰めて封鎖されていた。玄門は幅1.32m，高さ推定1.00m，羨道部の幅0.87m，長さ1.45m。玄室は奥壁幅1.95m，玄門幅2.00m，高さ1.37mで断面三角形の所謂テント型であるが，梁にあたる部分がほとんどないので，三角錘に近い形状を成している。また玄室平面形は，すぐ西隣の１号穴の玄室を意識したためか，西側に約20㎝，東側に約65㎝張り出した片袖状になっている。前庭部も掘り始めでは１号穴と共有している部分もある。更に東隣には３号穴，上部には４号穴が構築されており，１号穴と３号穴，４号穴に囲まれた狭い斜面空間に構築されている。奥壁と左側壁の一部に幅10～20㎝の排水用と思われる溝が穿たれているのが観察されるが，中央部には無い。

玄室床面には人骨らしき黒い棒状の塊が，左奥壁部分と右羨門付近に集中して認められる。部位や形状は全く判別できなかった。

遺物は，前庭部で輪状つまみの蓋（22）１個と擬宝珠つまみの蓋が２個（20・21）あった。玄室床面では高台付坏１個（16），低脚坏１個（19），輪状つまみの蓋２個（17・18）が発見された。低脚坏は坏径11.6㎝，高さ4.6㎝のの小型のものである。同時に伴出している他の遺物と比較すれば，或いは高台部分の少し高いものとも考えられる。輪状つまみの蓋はかえりが付いたものである。



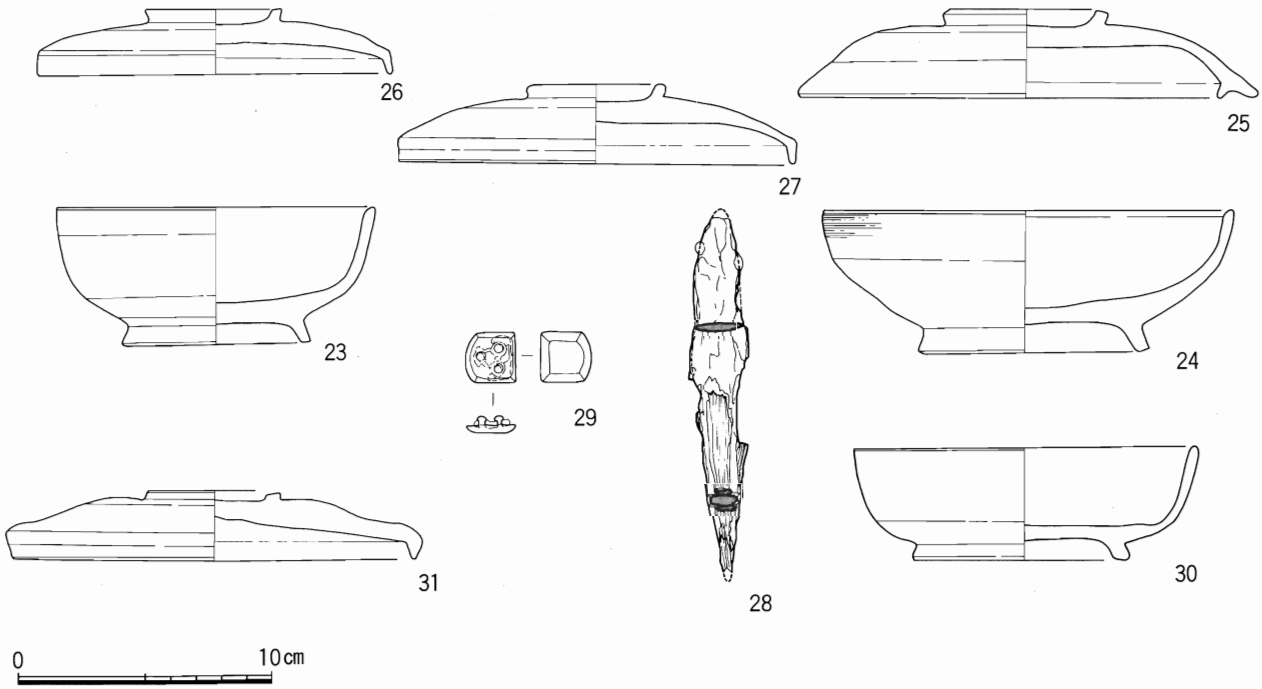
第10図　筆ノ尾２号穴出土遺物実測図

3） 第３号穴

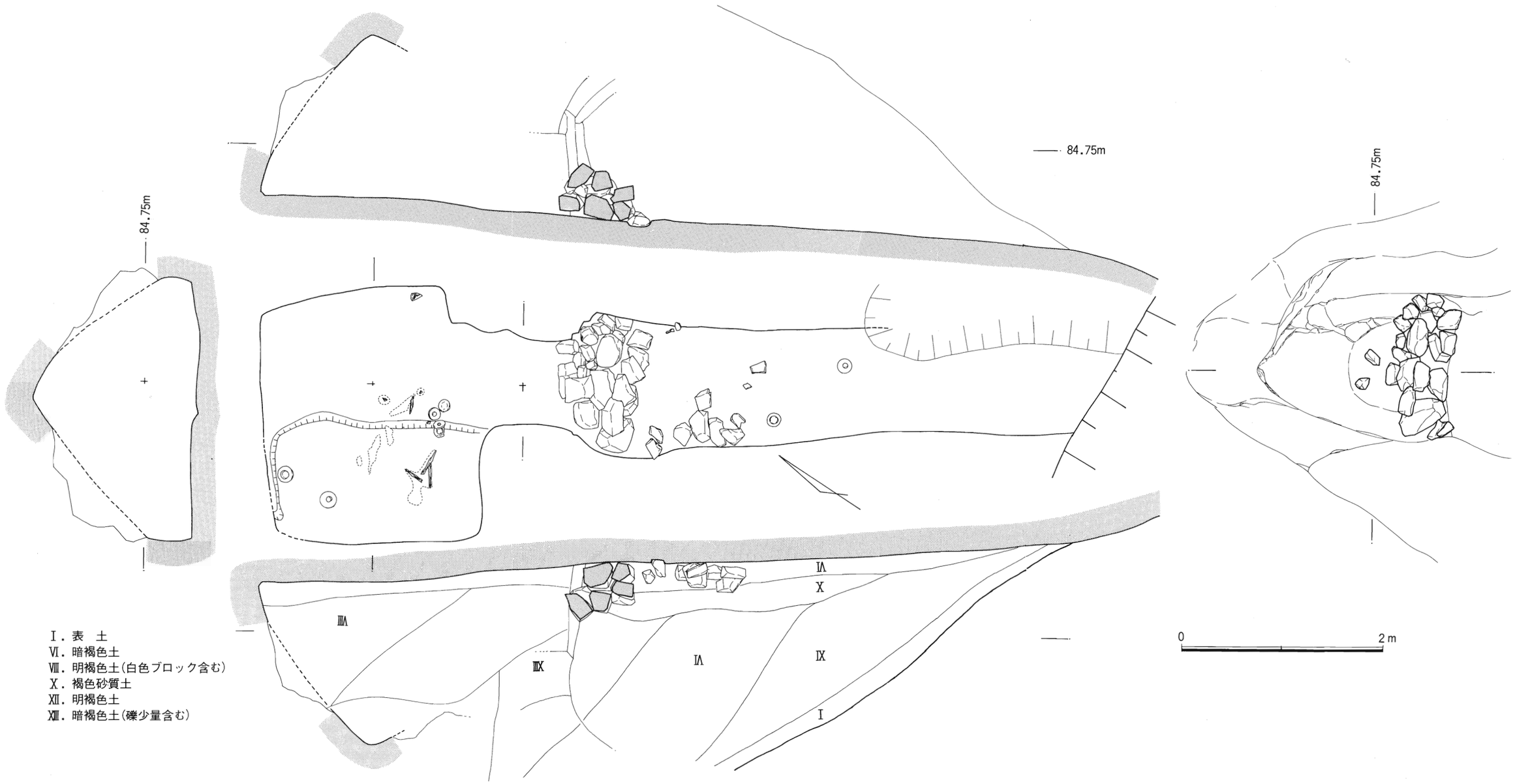
玄室床面の奥壁の標高は84.23m，前庭部の長さ5.1m，掘り始めの幅約1.1m。１号・２号と同様に人頭大～60cmの石を使って，玄門付近を完全に埋めて閉塞されていた。玄門は幅1.4m，高さ推定1.5m，羨道部の幅0.83m，長さ0.80m。玄室は奥壁幅2.18m，玄門幅2.56m，高さ1.65mで２号穴と同様に断面三角形で，梁の部分がほとんどない，三角錐に近いテント型の横穴である。１号・２号穴より，１mほど高い位置に構築されている。玄室は天井部が完全に崩壊して埋まっていた。

玄室右側は，地山を10cmほど高く残しており，人骨と見られる黒色の塊が数ヶ所で観察されるが，土砂に埋もれていたためか遺存状態が極めて悪く，どの部位にあたるかは特定出来なかった。

遺物は，前庭部に輪状つまみの蓋が１個（31），高台付坏が１個（30）あった。玄室内床面には輪状つまみの蓋が３個（25～27）と，高台付坏が２個（23・24），鉄製の刀子（28），及び束帯の一部とみられる銅製の金具（29）が発見されている。輪状つまみの蓋はかえりの付いたものが１個（25），かえりの無いものが２個（26・27）ある。かえりの付いた蓋は口径18.2cmあり，玄室の奥壁に近い場所で１個だけ発見された。遺物の出土状況から考えると，24の高台付坏とセット関係にあるようである。刀子は長さ14.5cm，厚さは刀身で0.3cmほどである。柄の部分には木質が残っており，鞘状の木製品で覆っていたと思われる。銅製品は一辺２cmの方形を成し，厚さは0.3cmある。一方の側に三本の突起がついており，これに紐状の異物が巻き付けてある。伴出遺物の時期的な特徴と，こうした形状から考えられるのは，束帯に使用した腰にまわす帯の先端の金具ではないかと思われるが，これに付随する遺物は発見されなかったので，詳細は不明である。



第11図　筆ノ尾３号穴出土遺物実測図



第12図　筆ノ尾３号穴調査成果図

第13図　筆ノ尾４号穴調査成果図

4） 第４号穴

２号穴の直上に構築された横穴である。玄室床面奥壁の標高は86.88m，前庭部の長さ5.1m，幅は前庭部の前で0.92m，羨門付近で1.56mある。これも最大50～60cmの石を使い，羨門を閉塞している。閉塞石の上や中ほどには，埋没した須恵器蓋や坏が発見される。羨門は幅1.19m，高さ1.38mある。羨道は長さ1.5m，中央の幅0.83m，玄室は奥壁幅2.62m，玄門幅2.84mあり，筆ノ尾横穴群の中で平面積的に最も大きい横穴である。この横穴の玄室は，全体に崩壊しており，高さや横穴の形態を知ることは出来なかった。ただ，側壁の立ち上がりの状況からみると，蒲鉾型の妻入りの横穴墓と推定される。

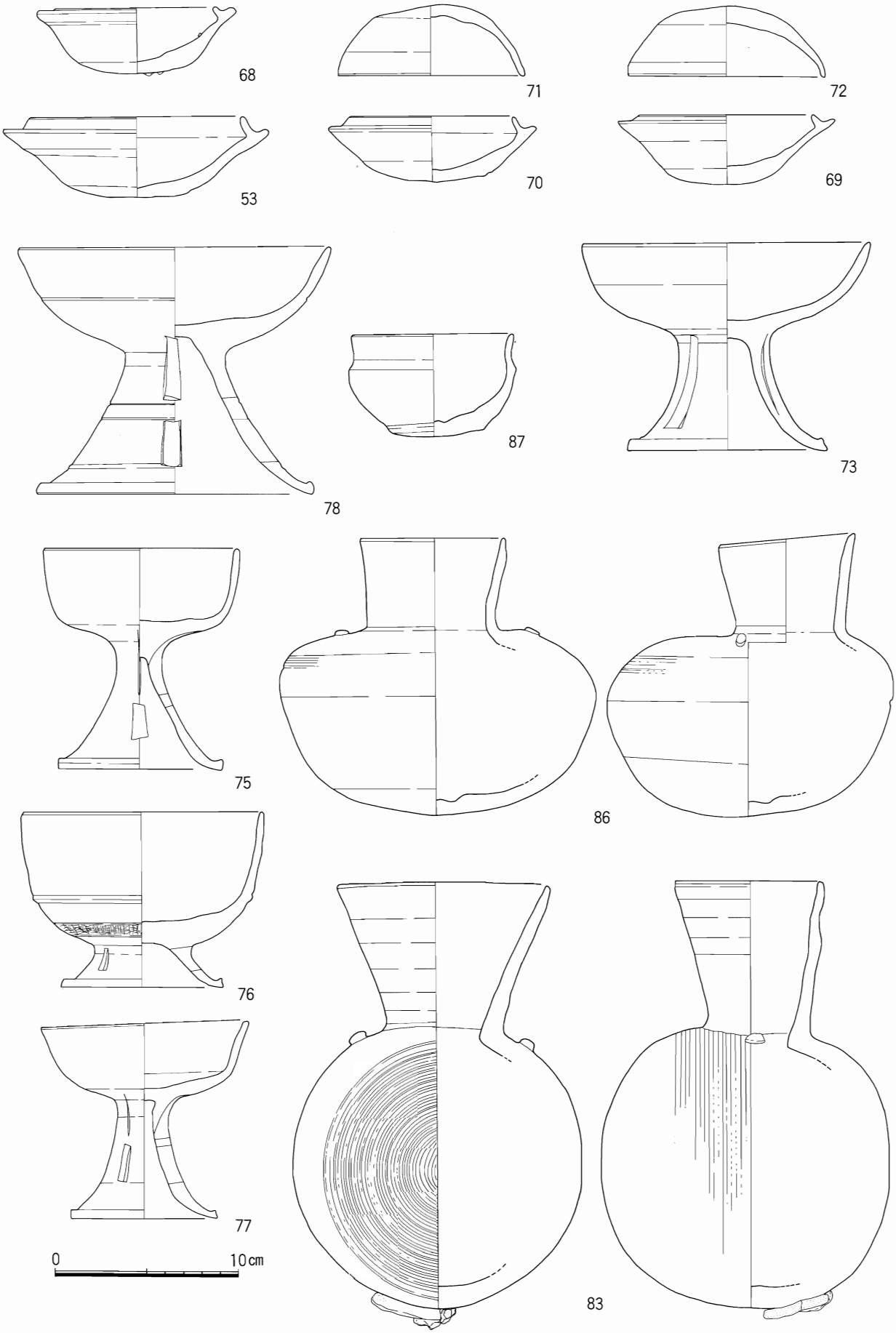
玄室の床面は，四周を上端幅10cmほどの排水溝が巡り，上端幅20cmほどの玄室中央に走る排水溝で区画して左右に屍床を作る。右側奥壁には須恵器の甕片と坏蓋を敷き詰めた屍床があり，その手前には長方形の石が２個，あたかも木棺を載せたごとくに配石されている。左側の玄門付近にも大型の石が見られるが，その下には坏身が入り込んでいるので，これは後世に動かされたものであろう。蓋坏は全部で40個体以上，瑙３個，広口壷や高坏など，供献された須恵器は60個体以上にのぼる。蓋坏は身もすべて裏返しに置かれていた。一部の須恵器は玄室奥壁に積み重ねるように置かれていた。また，中央の排水溝からは鉄製の素環頭太刀の柄頭や，その鯉口の部分品，及び鉄鏃数本が検出された。

玄室床面の右側と左側では，その供献された様相も量も須恵器の形態も大きく違うので，奥壁に置かれた土器等は追葬の際，寄せ集められたものと考えられる。また，玄室の埋土中にも甕片等の土器が埋まっており，少なくとも２度の追葬が行われたものと推察される。

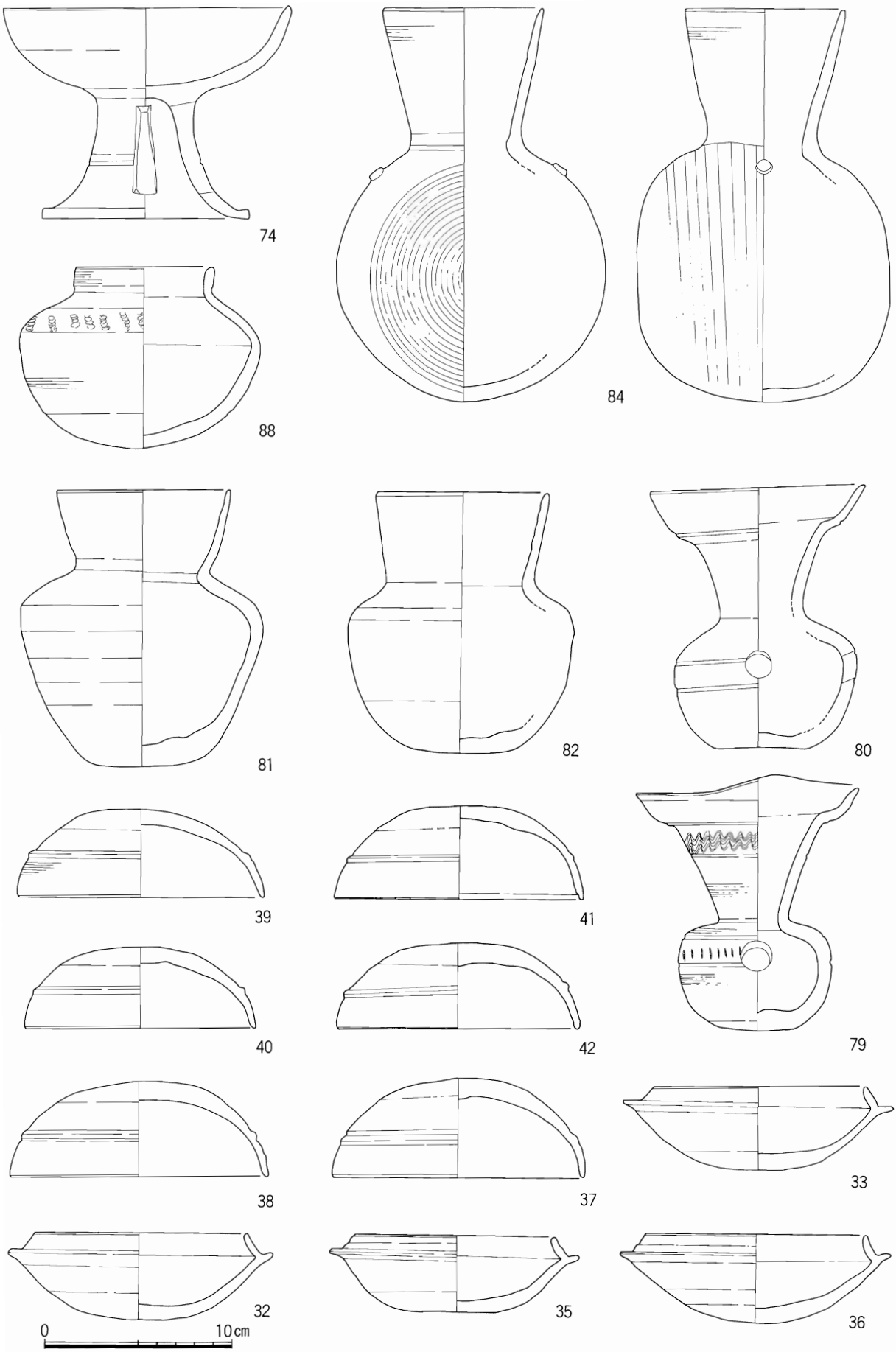
遺物の中には，天井部や底部に赤い顔料が付着している坏身２個，坏蓋１個がある。それらの玄室での位置は，右須恵器床の奥壁中央よりに集中しているので，あるいは，このあたりに，赤色顔料を塗彩された人骨頭部があったものと推定できる。すなわち通有の横穴墓の埋葬方法と異なり，頭部を奥壁側に置いたもののようである。

遺物を位置的・形態的に集計すると，前庭部では小型で輪状つまみのついた坏蓋１個（102），長頸壷１個（103）が出土，玄室内では，坏蓋20個，坏身20個（32～72），高坏６個（73～78），瑙２個

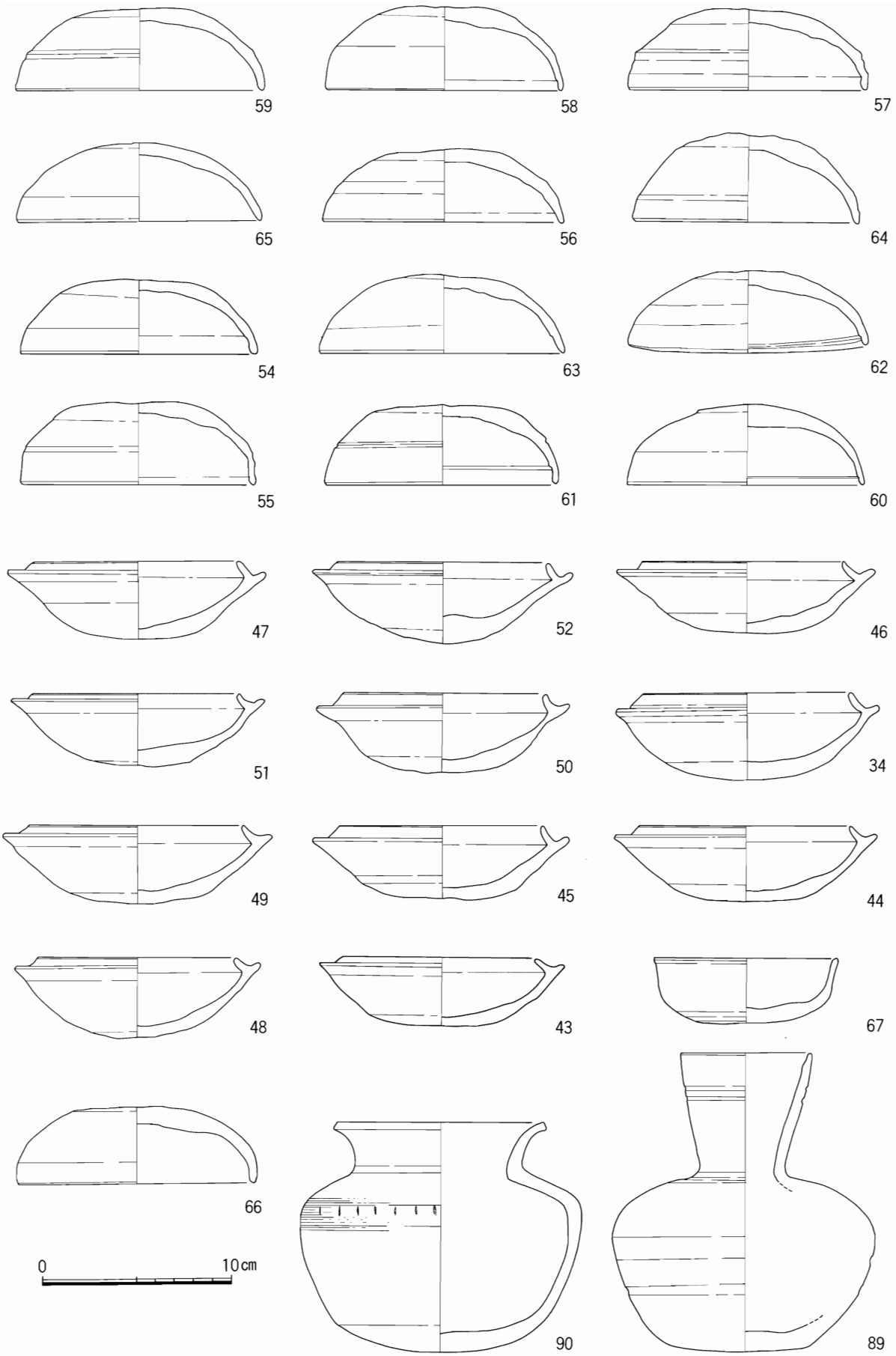
図版　赤色顔料の付着した蓋坏



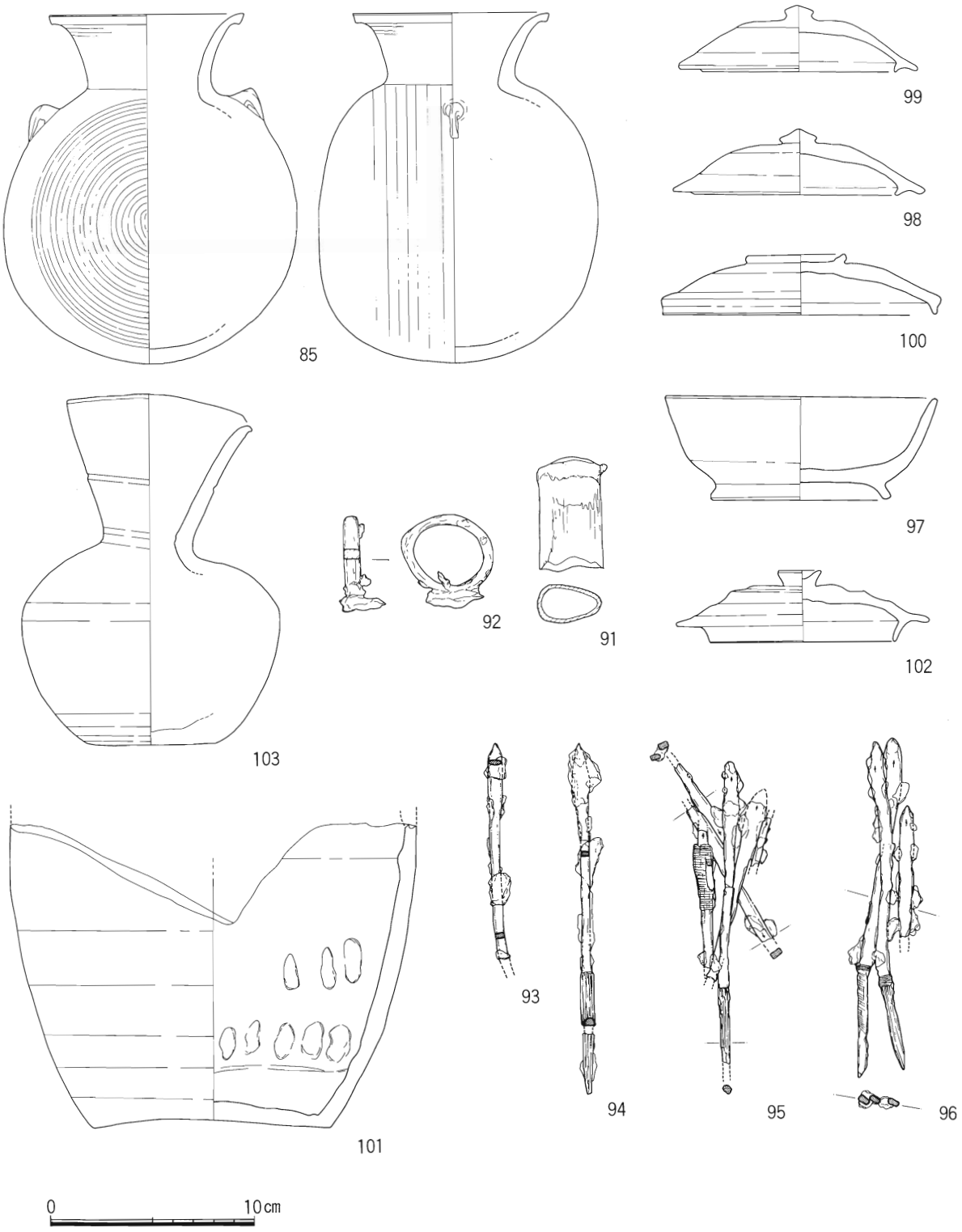
第14図　筆ノ尾４号穴出土遺物実測図(1)



第15図　筆ノ尾４号穴出土遺物実測図(2)



第16図　筆ノ尾４号穴出土遺物実測図(3)



第17図　筆ノ尾４号穴出土遺物実測図(4)

(79・80)，坩2個（81・82)，提瓶3個（83～85)，平瓶1個（86)，短頸壷1個（88)，長頸壷1個(89)，広口壷1個（90)，碗1個（87)，合計56個が出土した。鉄製品は素環頭太刀柄頭（91)，鉄製太刀金具（92)，鉄鏃11本（93～96）が検出されている。玄室内の埋土中からは擬宝珠つまみの蓋2個（98・99)，輪状つまみの蓋1個（100)，高台付坏1個（97）があった。

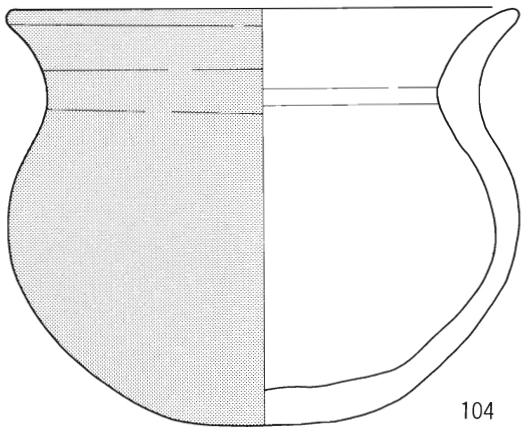
玄室左側の蓋坏（67～72）は径10cm前後の小型のものである。玄室右側の蓋坏は左側のものに比べて径が大きく量も多い。この中で，特に32～42までの蓋坏は，形状がふっくらとしていて，坏蓋の凸帯もしっかりし，丁寧な削りによって切り離しを調整する古い特徴を持つものが含まれている。また，奥壁に近い場所で，3個の坏蓋に赤い塗料が付着しているのが認められる。位置的に遺骸の頭部に塗布されたベンガラが流れたものではないかと考えられる。

素環頭太刀の柄頭と考えられる鉄製品は，径4.6cmあり，幅0.8cm，厚さ0.5cmの鉄板を円形に丸めたものである。また，太刀の金具と思われる鉄製品は，この円形の柄頭が繋がる部分と思われる。鉄鏃は錆で付着してしまった3本の塊と同じく6本の塊がある。いずれも逆刺のない細身のものである。

5） 第5号穴

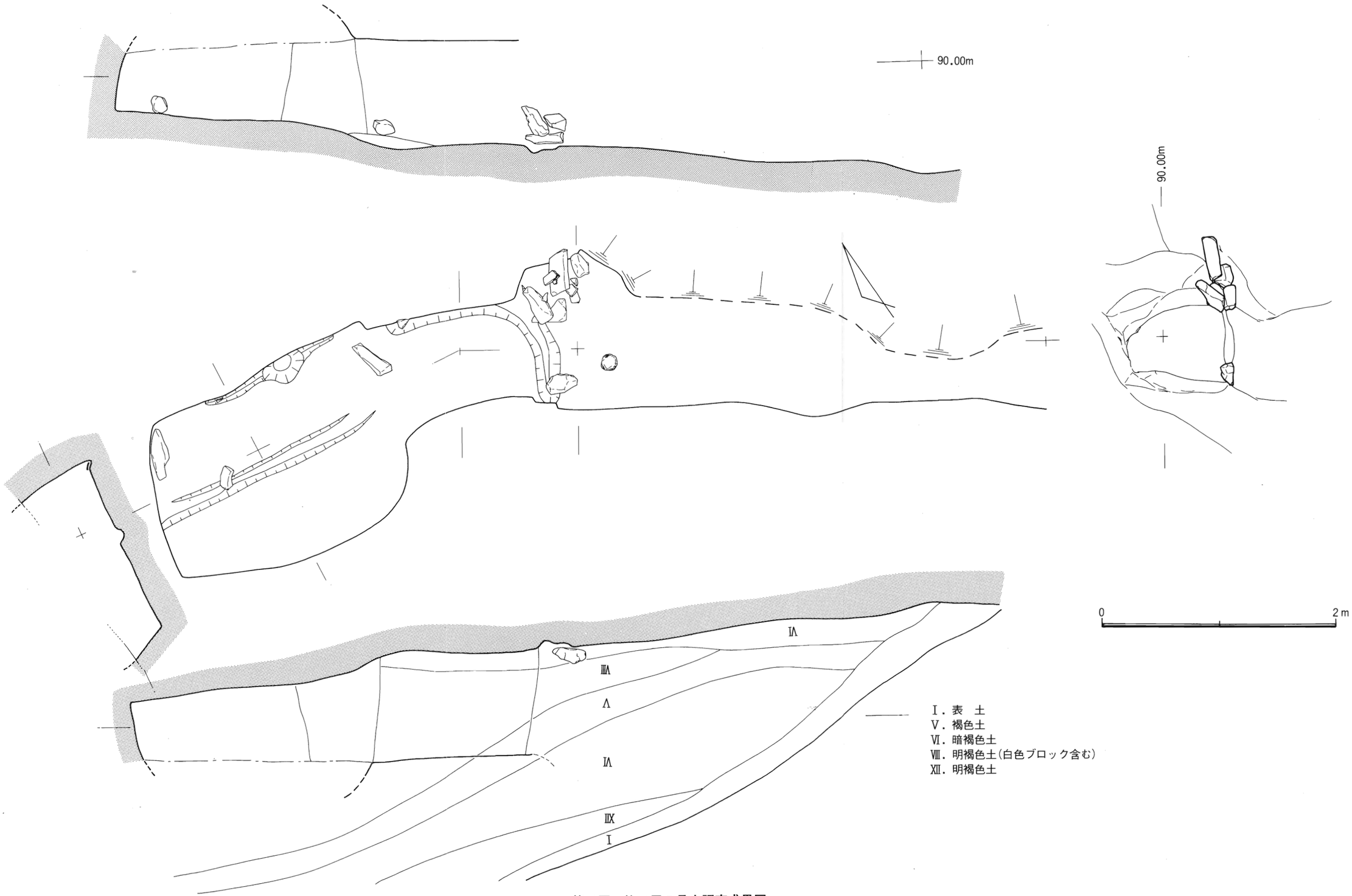
4号穴の右上に構築されている。前庭部は隣接する6号穴との前庭部中央の床面に穴があいて右側が大きく崩れているが，幅は羨門付近で1.28m，長さは現存4.35m。羨門は幅1.16m，高さ0.80m，羨道の長さ1.1mを計る。羨門付近には30～40cmの石，6個が認められるが，これによって閉塞された状況ではない。この5号穴は本横穴群の中では唯一，閉塞の方法が異なっている。本来は，後の追葬を考えて，こうした簡素な方法によって構築されていたものではないかと推察される。

玄室は奥壁幅1.35m，玄門側幅1.55m，奥行2.20m。側壁の立ち上がりから推定すると，断面三角形を呈する横穴と思われる。玄室東側の張り出しは玄門付近で10cm，西側の張り出しは55cmあって片袖に近い平面形をし，さらに羨道から西に向って弓状に曲がって造られている。隣接する6号穴の玄室を破壊しないで，かつ下段の4号穴とも競合しないように狭い空間を選んだ結果と見られる。内部は天井部が落盤し完全に埋まっていた。床面には中央に浅い溝が走っているほか，右側に2個の石が，ちょうど棺台のごとく配置されている。

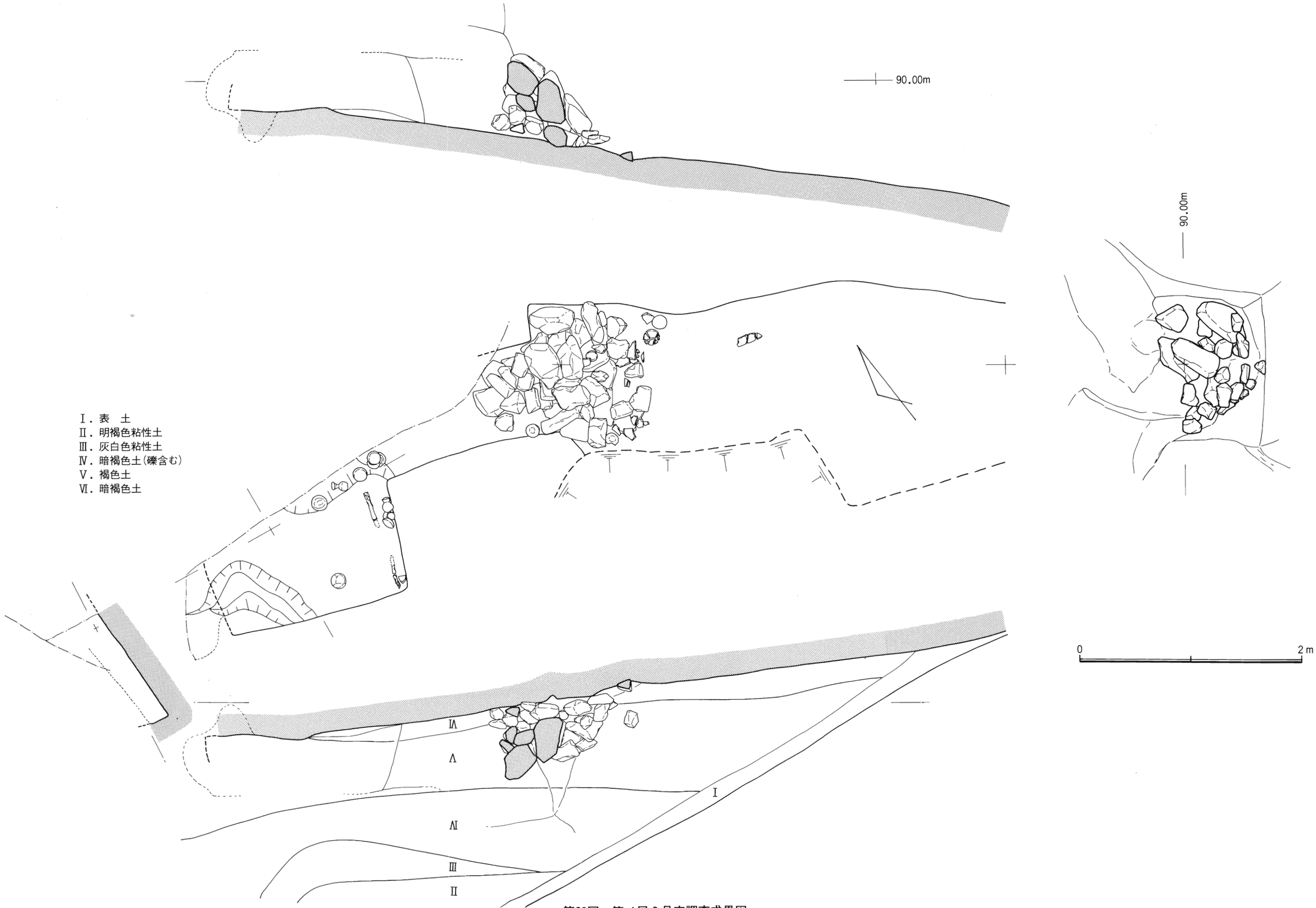


第18図　筆ノ尾5号穴出土遺物実測図

図版　筆ノ尾5号穴出土赤色塗彩広口壺



第19図　筆ノ尾５号穴調査成果図



第20図　筆ノ尾６号穴調査成果図

遺物は甕片が前庭部から玄室床面にかけて点々と検出された他には発見されなかった。唯一の遺物は，羨門付近で発見された赤色塗彩の土師質の壷（104）である。口径12.3cm，器高10.2cmの丸底の広口壷で，胎土は白色の砂粒を多く含んで荒く，表面的な調整もほとんど施されていない。赤色顔料を塗布した土師器は6号穴の玄室内でも発見されている。

6） 第6号穴

5号穴のすぐ右側に隣接して構築された横穴。これも前庭部は完全に残っていないが，羨門付近で幅1.38m，長さは4.30mある。羨門の閉塞は石によるもので，これも30～40個の石が詰められている。羨門の幅は1.20m。閉塞石の前面及びその間には，須恵器甕片や蓋坏が埋没していた。

玄室は完全に崩壊し，ほとんど平面形しか観察されない。また，土質が悪く，地山面に沿って斜めに剝離する状態であったので，先の5号穴とともに重機による掘削を行い，床面部分をのみを残して調査を行った。また，工事区域の西端にあたり，削平される法面にかかっていたので，東側半分のみ調査を行った。

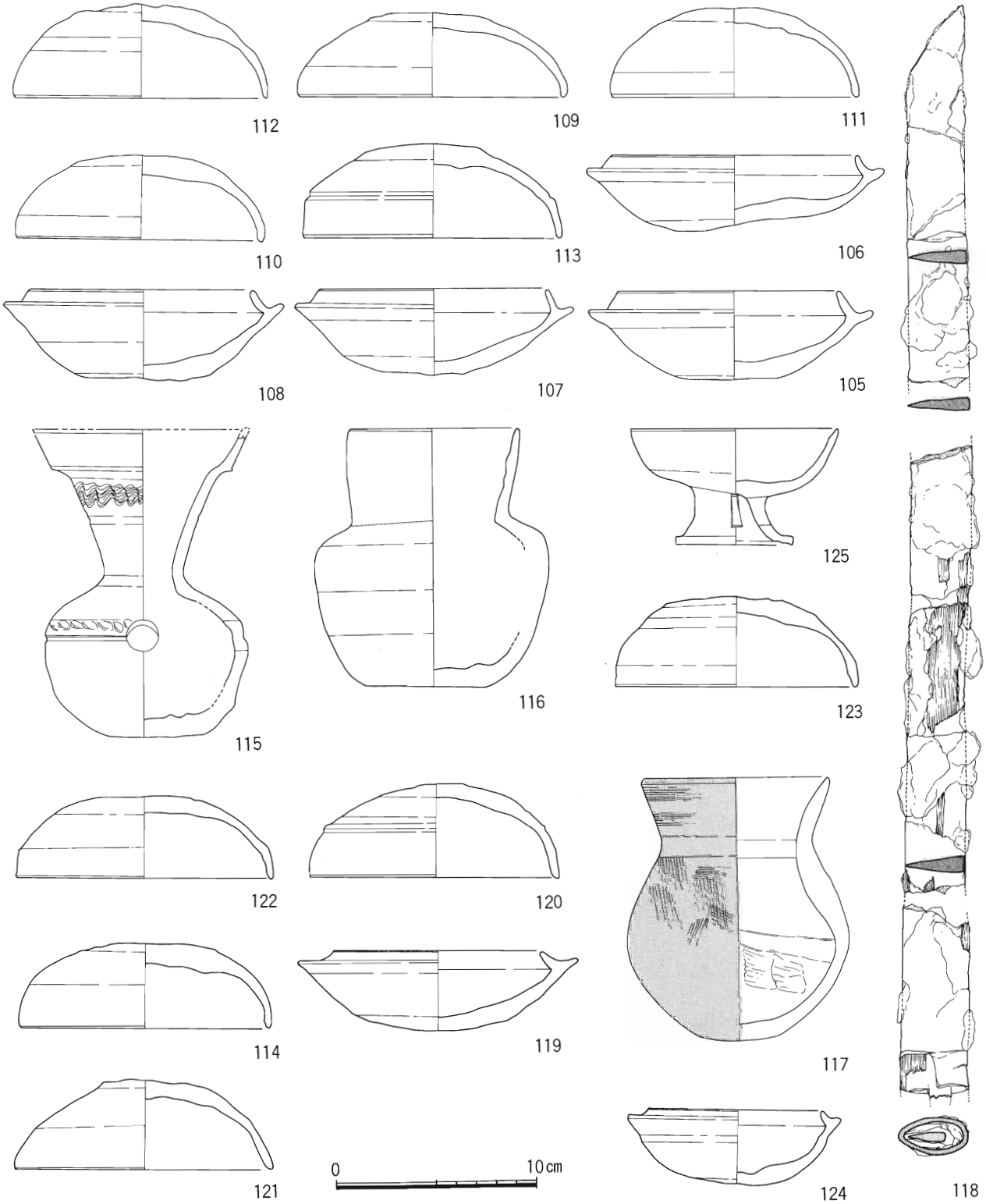
玄室の規模は奥行1.80mで，幅は玄門側で推定2.50mである。中央に幅の広い排水施設が設けられているようである。側壁の立ち上がりは直線的であるので，断面三角形の形状をしていたものと推定される。

遺物は，中央の排水溝内に坏身2個，坏蓋4個（105～113），瑕1個（115），右側の玄門付近に坏身2個，坏蓋1個と坩1個（116）及び赤色塗彩の土師器壷1個（117）と直刀1振（118）があった。須恵器の坏身のうちの3個は玄門の中央付近に重ねて置いてあった。蓋坏は切り離しの調整がほとんど無いものである。赤色顔料が塗布されている土師器は口径9.3cm，器高13.2cmの丸底の小型の壷である。玄門左側の壁に押し付けられるようにして潰されていた。直刀は玄門をふさぐように置かれていたが，切先と，鐔（つば）から柄頭（つかがしら）にかけての一部が残っているのみで，中央の刀身と柄頭の先端は残っていなかった。身幅3.0cm，みねの厚さは0.6～0.7cm。遺存された状態から推定すると，長さは80cm以上はあったものと推察する。

4．出土遺物の概要

筆ノ尾横穴群で出土した遺物のうち，最も出土量の多い蓋坏を例にとってみると，概略4つのタイプに区分出来るようである。すなわち，切り離し部分を丹念な削りによって調整するもの（タイプⅠ）と，法量は同程度であるが削りが雑なもの，もしくはそうした調整をほとんど施さないもの（タイプⅡ），法量が小型化したもの（タイプⅢ），輪状つまみの蓋と高台付坏のもの（タイプⅣ）である。タイプⅡの土器は，切り離し部分の削りの有無によって，さらにAタイプ（わずかでも削りによる調整の見られるもの）とBタイプ（全く削りの見られない未調整のもの）に分類した。資料が蓄積すれば，形態や調整の方法等の点で，さらに詳細な分類が出来るように思われる。

さて，これまでの研究成果によって，このタイプは大きくⅠ→ⅡA→ⅡB→Ⅲ→Ⅳに向って変化していくものとされている。そこで，これらの4タイプの出土状況を玄室と前庭部とで見ると以下のようになっている。



第21図　筆ノ尾６号穴出土遺物実測図

出土遺跡タイプ別一覧表

	Ⅰ	ⅡA	ⅡB	Ⅲ	Ⅳ	
1 号 穴						
2 号 穴						
3 号 穴						
4 号 穴						
5 号 穴						
6 号 穴						

（上段は玄室内・下段は前庭部～羨門）

タイプⅣの土器は，５号穴を除く全ての横穴で検出されているが，このうち玄室の床面で検出されたのは，２号・３号穴のみである。１号穴の玄室床面にはタイプⅡＡの土器のみで前庭部～羨門付近ではタイプⅡＢのものだけである。４号穴の床面ではタイプⅣを除くすべての土器が検出された。この４号穴の玄室内にもタイプⅣの土器が出土したが，これらはすべて埋土中であり，床面に残された土器はなかった。

閉塞の状況は，５号穴のみが石積みがなされておらず，他は羨門全体を人頭大の石で覆い尽くす方法を取っている。５号穴は当初の構築，埋葬のみで追葬はなかったように思われる。

また，横穴の平面的な配置状況は，４号穴を中心として上下に広がっていったようであり，５号穴や，２号穴は，隣接してすでに構築されていた横穴の狭間に造られた様子がうかがわれる。従って，６号穴→５号穴という関係と１号穴→２号穴という前後関係が考えられる。

このようなすべての状況から総合的に推察すると，横穴の構築順序は４号穴→１号穴・６号穴→５号穴→３号穴→２号穴の順が考えられる。また，１号穴と６号穴は少なくとも１度の追葬，４号穴は３回の追葬があったらしいと推察されるのである。

5．小　　結

筆ノ尾横穴群の所在する丘陵の土質は，泥岩質で剝離して崩れやすく，横穴を構築するには極めて脆い。砂岩質の地域はごく限られた部分にしか見られないが，この限られた土質を選んで筆ノ尾横穴群は構築されている。そのため，狭い範囲に上下に密集して作られたものであろうと推察する。

最初に構築された横穴が4号穴であり，時期的には6世紀後半頃と思われる。その後上下に横穴墓を作り，墓域を拡張していったものであろう。最終的には2号穴と3号穴の構築と1号穴と4号穴の追葬を最後として，7世紀中頃に途絶えたと思われる。その間，最初に作られた4号穴は数度にわたり追葬され，最後まで使用された形跡が認められる。

東長江町地内での横穴の発見と発掘調査は初めてであり，今後のこうした資料の蓄積によって，この地域での古墳時代の新たな展開が期待されるものである。

第2表　筆ノ尾横穴群出土遺物一覧表

◆1号穴遺物一覧表

番号	出土地点	種　別	口径	器高	備　　考	形態
1	玄　室	坏　身	13.2	3.9	全体にナデ 歪みあり	ⅡA
2	玄　室	坏　身	13.2	3.6	簡単な削り 暗灰色 内面に1条の掻キズ	ⅡA
3	玄　室	坏　身	13.3	4.2	削り 焼成良 器厚あり	ⅡA
4	玄　室	坏　蓋	13.4	4.9	少し丁寧な削り 歪みあり	ⅡA
5	玄　室	坏　蓋	12.0	4.4	削り 焼成良 器厚あり 歪み	ⅡA
6	玄　室	平　瓶	8.2	15.4	把手円形 全体に荒いナデ	
7	玄　室	瓶	11.8	14.0	平底に近い 胴部頚部に文様	
8	玄　室	高　坏	9.6	9.2	二方二段 ただし上段は切込	
9	玄　室	鍍銀環	2.5	－	玄室内の頭骨付近	
10	羨　門	坏　身	12.8	3.6	未調整 全体に調整荒い	ⅡB
11	羨　門	坏　蓋	12.3	3.6	未調整 調整荒い	ⅡB
12	前　庭	輪状蓋	15.6	2.9	かえり無し	Ⅳ
13	前　庭	輪状蓋	15.3	3.0	かえり無し	Ⅳ
14	前　庭	瓶	13.0	5.3	とっくり状の頚部 底部に×印	
15	前　庭	鍍銀環	3.0	－	前庭部で須恵器片と共に発見	

◆2号穴遺物一覧表

番号	出土地点	種　別	口径	器高	備　　考	形態
16	玄　室	高台付坏	13.5	5.6	器厚あり	Ⅳ
17	玄　室	輪状蓋	14.5	2.6	かえり 胎土荒い	Ⅳ
18	玄　室	輪状蓋	17.6	3.2	かえり	Ⅳ
19	玄　室	低脚坏	11.6	4.6	脚貼り付け	
20	前　庭	擬宝珠蓋	10.1	2.8	擬宝珠の痕跡 自然釉 かえり無し	Ⅳ
21	前　庭	擬宝珠蓋	13.3	2.1	かえり 自然釉	Ⅳ
22	前　庭	輪状蓋	9.2	3.4	小型輪状つまみ 紫灰色 かえり無し	Ⅳ

◆3号穴遺物一覧表

番号	出土地点	種　別	口径	器高	備　　考	形態
23	玄　室	高台付坏	12.7	5.4	砂粒やや多い	Ⅳ
24	玄　室	高台付坏	16.3	5.5	暗灰色 胎土密 焼成良	Ⅳ
25	玄　室	輪状蓋	18.2	3.6	かえり	Ⅳ
26	玄　室	輪状蓋	14.0	2.6	かえり無し	Ⅳ
27	玄　室	輪状蓋	15.6	3.1	かえり無し 内部に1条の掻きキズ	Ⅳ
28	玄　室	刀　子	14.5	－	木質が付着している	
29	玄　室	銅製金具	2.0	－	石帯もしくは革帯の先の金具か？	
30	前　庭	高台付坏	13.6	4.5	暗灰色 胎土密 焼成良	Ⅳ
31	前　庭	輪状蓋	16.3	2.8	かえり無し	Ⅳ

◆4号穴遺物一覧表

番号	出土地点	種　別	口径	器高	備　　考	形態
32	玄　室	坏　身	14.1	4.6	削り鮮明 胎土白っぽい	Ⅰ
33	玄　室	坏　身	14.4	4.5	削り鮮明 白っぽい	Ⅰ
34	玄　室	坏　身	13.8	4.7	削り鮮明 明るい灰色	Ⅰ
35	玄　室	坏　身	13.4	4.1	明瞭な削り有り 胎土も白っぽい	Ⅰ
36	玄　室	坏　身	14.4	4.7	削り鮮明 白っぽい	Ⅰ
37	玄　室	坏　蓋	13.6	5.3	削り明瞭 凸帯鮮明	Ⅰ
38	玄　室	坏　蓋	13.8	5.1	削り有り 焼成悪く赤灰色 凸帯明瞭	Ⅰ
39	玄　室	坏　蓋	13.3	4.7	削り鮮明 凸帯明瞭	Ⅰ
40	玄　室	坏　蓋	12.4	4.4	削り鮮明 白っぽい	Ⅰ
41	玄　室	坏　蓋	13.4	5.0	削り鮮明 凸帯明瞭 白っぽい	Ⅰ
42	玄　室	坏　蓋	13.0	4.6	削り鮮明 凸帯明瞭	Ⅰ
43	玄　室	坏　身	13.0	3.6	削り有るが暗灰色 赤色顔料付着 ×印	ⅡA
44	玄　室	坏　身	13.8	4.0	削り有るが暗灰色 赤色顔料付着	ⅡA
45	玄　室	坏　身	13.6	3.8	削り一部 底部に格子の掻き傷	ⅡA
46	玄　室	坏　身	13.6	3.8	削り有るが胎土硬く色暗い	ⅡA
47	玄　室	坏　身	13.6	4.1	削り有るが雑	ⅡA
48	玄　室	坏　身	12.9	4.3	未調整	ⅡB
49	玄　室	坏　身	14.2	4.1	未調整 外面に自然釉	ⅡB
50	玄　室	坏　身	13.4	4.2	未調整	ⅡB
51	玄　室	坏　身	13.4	3.9	未調整	ⅡB
52	玄　室	坏　身	13.8	4.3	削り無し未調整	ⅡB
53	玄　室	坏　身	14.5	4.4	削り無し	ⅡB
54	玄　室	坏　蓋	12.5	3.9	削りわずか 赤色顔料付着	ⅡA
55	玄　室	坏　蓋	12.6	4.4	多少の削り 切り離しは未調整	ⅡA
56	玄　室	坏　蓋	12.8	3.8	削り有るが形状小型 接合復元	ⅡA
57	玄　室	坏　蓋	12.7	4.3	削り有るが凸帯不明瞭	ⅡA
58	玄　室	坏　蓋	12.6	4.4	削り有るが雑 内面にわずかな段	ⅡA
59	玄　室	坏　蓋	13.2	4.3	削り有るが雑	ⅡA
60	玄　室	坏　蓋	12.6	4.3	未調整	ⅡB
61	玄　室	坏　蓋	12.6	4.2	未調整	ⅡB
62	玄　室	坏　蓋	12.6	4.3	未調整 変形している	ⅡB
63	玄　室	坏　蓋	13.1	4.2	未調整	ⅡB
64	玄　室	坏　蓋	12.0	4.6	未調整 器厚あり	ⅡB
65	玄　室	坏　蓋	12.9	4.2	未調整	ⅡB
66	玄　室	坏　蓋	12.5	4.1	削り無し 自然釉付着 埋土中	ⅡB
67	玄　室	坏　身	9.8	3.4	丁寧な削り 平底に近い 小型	Ⅲ
68	玄　室	坏　身	11.0	3.6	未調整 自然釉? 小型	Ⅲ
69	玄　室	坏　身	11.8	3.8	小型	Ⅲ
70	玄　室	坏　身	11.4	3.6	未調整 小型	Ⅲ
71	玄　室	坏　蓋	10.2	3.9	未調整 丸底	Ⅲ
72	玄　室	坏　蓋	10.8	3.8	未調整 小型	Ⅲ
73	玄　室	高　坏	15.4	11.2	二方一段 三方目は切り込みのみ	
74	玄　室	高　坏	15.4	11.3	二方一段 三方目は切り込みのみ	
75	玄　室	高　坏	10.6	11.9	二方二段 焼成悪い	
76	玄　室	高　坏	13.0	9.5	三方一段 胴部に文様 坏部大きい	
77	玄　室	高　坏	10.8	11.0	三方二段	
78	玄　室	高　坏	16.9	13.4	二方二段	
79	玄　室	瓶	11.9	13.5	平底に近い 頸部と胴部に文様 自然釉	
80	玄　室	瓶	11.3	14.2	平底 胴部頸部に文様無し	
81	玄　室	坩	9.2	14.8	わずかな自然釉	
82	玄　室	坩	9.1	14.0	底部に×印	
83	玄　室	提　瓶	10.6	23.2	把手円形 自然釉	
84	玄　室	提　瓶	8.4	21.2	把手円形	
85	玄　室	提　瓶	9.6	17.2	把手 自然釉付着	

番号	出土地点	種　別	口径	器高	備　　考	形態
86	玄　室	平　瓶	7.4	15.0	自然釉付着	
87	玄　室	碗	9.0	5.5	底部平底に近い 手持ちによるへら削り	
88	玄　室	短頸壺	7.7	9.7	胴部に文様	
89	玄　室	長頸壺	6.8	15.8	自然釉 紫灰色 平底に近い	
90	玄　室	広口壺	10.8	12.1	自然釉 胴部に文様	
91	玄　室	鉄製柄頭	4.6	—	素環頭太刀の柄頭か？ 鉄製	
92	玄　室	鉄製柄頭	5.5	—	柄の本体部分の頭か？ 内部に木質部残	
93	玄　室	鉄　鏃	—	—		
94	玄　室	鉄　鏃	—	—		
95	玄　室	鉄　鏃	—	—	６本が錆で付着している	
96	玄　室	鉄　鏃	—	—	３本が錆で付着している	
97	玄　室	高台付坏	13.4	5.1	自然釉 回転糸きり 玄室内の埋土中	Ⅳ
98	玄　室	擬宝珠蓋	12.5	3.1	かえり 玄室内埋土中	Ⅳ
99	玄　室	擬宝珠蓋	11.9	3.2	かえり 玄室内埋土中 自然釉	Ⅳ
100	玄　室	輪状蓋	13.8	3.0	かえり無し 回転糸切 玄室内埋土中	Ⅳ
101	玄　室	壺　？	—	—	平底 羨門～玄室の埋土中	
102	前　庭	輪状蓋	12.4	3.5	小型輪状つまみ 階段状に成形	Ⅳ
103	前　庭	長頸壺	9.0	17.1	底部に井状の掻きキズ	

◆５号穴遺物一覧表

番号	出土地点	種　別	口径	器高	備　　考	形態
104	羨　門	広口壺	12.3	10.2	赤色塗彩土師器壺	

◆６号穴遺物一覧表

番号	出土地点	種　別	口径	器高	備　　考	形態
105	玄　室	坏　身	14.1	4.4	雑な削り 焼成悪 軟質 灰紫色	ⅡA
106	玄　室	坏　身	14.8	3.7	未調整 灰色 １条の掻きキズ 焼成良	ⅡB
107	玄　室	坏　身	14.0	4.3	未調整 ×印 焼成良	ⅡB
108	玄　室	坏　身	14.0	4.4	未調整 ２条の掻きキズ 自然釉	ⅡB
109	玄　室	坏　蓋	13.4	4.2	未調整 暗灰色 焼成やや悪	ⅡB
110	玄　室	坏　蓋	12.4	4.2	未調整 暗灰色 焼成やや悪	ⅡB
111	玄　室	坏　蓋	12.4	4.4	未調整 暗灰色 焼成やや悪	ⅡB
112	玄　室	坏　蓋	12.6	4.7	未調整 暗灰色 焼成やや悪	ⅡB
113	玄　室	坏　蓋	13.0	4.7	未調整 段あり 焼成悪脆い	ⅡB
114	玄　室	坏　蓋	12.6	4.3	未調整 器厚あり 玄室上の埋土中	ⅡB
115	玄　室	瓶	10.9	15.3	平底 自然釉 胴部頸部に文様	
116	玄　室	坩	9.5	12.9	底部に×印 胎土ざらついている	
117	玄　室	小型壺	9.3	13.2	赤色塗彩土師器壺	
118	玄　室	直　刀	—	—	身幅3.0cm 長さは80cm以上？	
119	羨　門	坏　身	14.0	4.0	削り 胎土荒い	ⅡA
120	羨　門	坏　蓋	12.6	4.7	削り有るが全体暗灰色 閉塞石の下	ⅡA
121	羨　門	坏　蓋	13.0	4.4	未調整 黒色砂粒多い 歪みあり	ⅡB
122	羨　門	坏　蓋	12.8	4.2	未調整	ⅡB
123	羨　門	坏　蓋	12.0	4.5	未調整 全体に調整雑	ⅡB
124	羨　門	坏　身	10.7	3.8	未調整 小型 閉塞石の下	Ⅲ
125	羨　門	高　坏	10.4	5.8	小型	

筆ノ尾第１号横穴出土人骨について

鳥取大学医学部法医学教室
井　上　晃　孝

Ⅰ．は　じ　め　に

松江市東長江町地内の筆ノ尾第１号横穴は，玄室床面の中央部に排水溝があり，その左右に屍床が作られていた。

玄室の右奥の壁際には，頭蓋骨３個が集骨状に位置し，その他多数の長管骨（上，下肢）は，左右の屍床全面に散乱していた。

骨の遺残性はやや不良で，完形のものはない。しかし，遺残骨の左右別，性別の識別可能なものがかなり含まれていた。

以下遺残骨数，遺残骨の部位別，個体数，性別，推定年齢，推定身長値等について報告する。

Ⅱ．遺　　残　　骨

玄室内には，多数の人骨が左右の屍床全面に散乱していた（図１）。

人骨採取時，玄室左側から順に採取番号をつけながら，玄室右奥まで採取番号１～33個の人骨を採取した。

その概要は，筆ノ尾第１号穴人骨一覧表（第１表）にまとめた。

次に，骨格順に，部位別，左右別，骨の遺残状態，推定性別，推定年齢，同一個体の可能性の順に一覧表にまとめた（第２－１表，第２－２表）。

Ⅲ．被葬者の推定身長

本横穴の被葬者数は，♂２体，♀２体＋２体(？)の６体が推定された。

そのうち，大腿骨で完形に近く，骨長が計測できたものについて，推定身長値を算定した結果を第４表に示した。[1) 2)]

♂２体のうち，１体（採取No.13,15）の身長は約164cm位，もう１体（No.30）の身長は約162cm位である。

♀のうち，１体（No.８）はピアソン法で約144cm位でやや低めの値，もう１体（No.25）はピアソン法で約141cmと低身長値である。

Ⅳ．考　　察

１．各骨の遺残個数から推定個体数と性別について

各骨の遺残個数，左右別からの推定個体数と性別を第３表にまとめた。

遺残骨数は，大腿骨と脛骨が最も多いことから，とくに両骨について個体数と性別について検討した。

大腿骨の個数は，８個（右４，左３，不明１）で右大腿骨が４個遺残することは，４体が埋葬されたことを意味する。左右不明骨１個あることは，これが仮りに右骨であるなら，個体数の最大限４体＋α（１体）が推察できる。仮りに左右不明骨が左骨であるなら，左３＋１で，左４，右（３＋１）で４体ということになる。

次に，脛骨の個数は10個（右３，左６，不明１）で，左脛骨が６個遺残することは６個体を意味する。さらに，左右不明骨１個があることから，これが左骨であるなら，最大限６体＋α（１体）ということになる。しかし，左右不明骨１個が右骨であるなら，右３＋１で４個体である。

人骨の上，下肢骨は，左右１対であるので，左右骨の多い方が遺残個体（被葬者）数の最大を示すことになる。

以上から，本横穴内の被葬者数は，６体の可能性が高い。６体の性別の内訳は，大腿骨では♂２体，♀２体が確認され，さらに左右不明骨１個（♀？）であるので，♀２体＋α（１体）が推察される。脛骨では♂２体，♀２体＋２体（？）の可能性が高い。

２．被葬者の個体識別

頭蓋骨３個（♂１，♀２）と大腿骨８個（♂２，♀２＋１(？)），脛骨10個（♂２，♀２＋２(？)）とその他の骨との個体識別は，骨の遺残性からみて，識別は不詳である。

３．被葬者の身長

本横穴で，身長推定できたのは４体で，内訳は♂２体，♀２体である。

♂２体のうち，１体（№13,15）は163.5cm，もう１体（№30）は162.1cmである。♀２体のうち，１体（№８）は143.8cm，もう１体（№25）は141.4cmである。

これらの身長値を関東地方人の古墳時代人の身長[3)]と比較したのが第５表である。

本横穴出土人骨の♂２体と♀２体の身長値は，関東地方の古墳時代人と大差ない。

山陰地方の古墳時代人（統計はでてないが，自験例からみても）と比較しても，大差ない平均的な身長値である。

４．被葬者の埋葬順序

本横穴の玄室内には，被葬者６体が埋葬されており，骨の遺残性はあまりよくない。

玄室内の副葬品も少なく，須恵器はⅢ期のみである。

最終被葬者は少なくとも，後世の攪乱がなければ，遺残骨は骨格順配列をしている筈であるが，そのような形跡はなく，玄室内に人骨多数が無造作に散乱している状態では，埋葬順序は不詳で，何回の追葬があったかも不詳である。

Ⅴ．ま　と　め

松江市東長江地内の筆ノ尾１号穴の玄室内には，多数の人骨が屍床全面に散乱していた。骨の遺残性はやや不良であったが，大半は性別，左右の別が可能であった。

被葬者数は６体で，内訳は♂２体，♀２体が確認され，さらに♀(？)２体が遺残していた。

頭蓋骨は３個遺残，♀２体と♂１体で，♀のうち，１体（№16）は壮年後期，もう１体（№18）は

壮年中期，♂（No17）は壮年前期位である。

被葬者の推定身長が計測できたのは，４体で♂２体，♀２体であった。♂２体のうち，１体は163.5cm，もう１体は162.1cm，♀２体のうち１体は143.8cm，もう１体は141.4cmである。

同一個体由来の頭蓋骨とその上，下肢骨の識別ができず，本横穴内に散乱する人骨６体の個体識別はできなかった。

参考文献

1．藤　井　　明（1960）：四肢長骨の長さと身長との関係に就て，順天堂大学体育紀要３，49－61．

2．Pearson, K.（1899）：Mathematical contributions to the theory of evolution. V. On the reconstruction of the stature of prehistoric races Phil. Trans. Roy. Soc. London. Ser. A. 192, 169－244.

3．平　本　嘉　助（1972）：縄文時代から現代に至る関東地方人身長の時代的変化，人類誌，80，221－236．

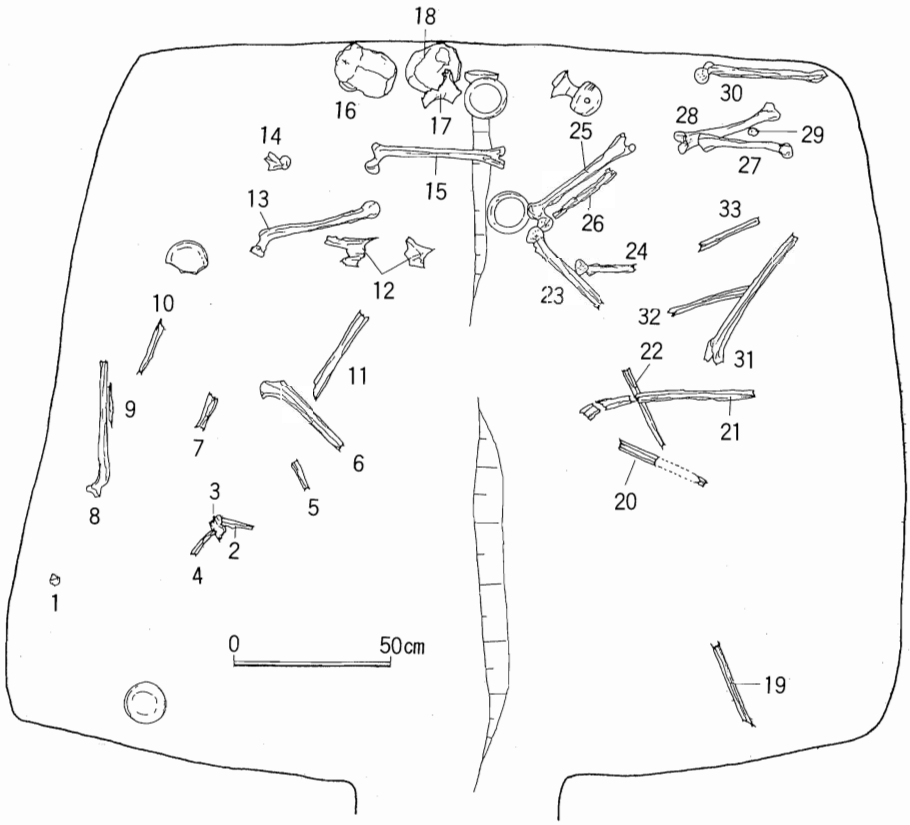


図1　筆ノ尾１号穴人骨採取番号

第１表　筆ノ尾１号穴出土人骨一覧表

番号	骨部位名	右	左	性別	備考
1	上腕骨（下端部）	不明			位置的に女性？
2	上腕骨（上半部）		○		性別不詳
3	下顎骨		○	女？	┐×××××678 1～5死後欠　8埋伏歯
4	大腿骨（骨体中央部）	不明		女？	脆い
5	右脛骨（骨体中央部）	○		女	
6	左脛骨（下端部欠）		○	男	
7	上腕骨（骨体中央部）	不明		女？	
8	大腿骨	○		女	全長40.5cm，脆くて一部崩壊（ピアソン法 143.7cm）
9	右腓骨（骨体中央部）	○		女？	
10	腓骨（骨体の一部）	不明		女？	
11	右腓骨	○		男？	
12	左寛骨（大座骨切痕）		○	男	
13	右大腿骨	○		男	全長43.5cm，上端部一部欠（身長 163.0cm）
14	寛骨（一部）	不明		男？	12と同じか
15	左大腿骨（完存，しかし下面欠）		○	男	全長44cm（身長 164cm）
16	頭蓋骨（底部欠）	―――		女	30代後半（壮年後期），朱付着？
17	頭蓋骨	○		男	右顔面，右側頭骨の一部，20代後半 ┐76×××××┌，朱？
18	頭蓋骨	―――		女	30代，右顔面部，頭頂部後部
19	左脛骨（上下欠）		○	女？	
20	左脛骨（骨体中央部）		○	女？	
21	左大腿骨（上下欠）		○	女	
22	上腕骨	不明		男？	
23	左脛骨		○	女	
24	右上腕骨（上下欠）	○		女	
25	右大腿骨	○		女	全長39.1cm（身長 141.4cm）
26	左脛骨		○	女	一部，位置的に23と一対か
27	右脛骨（上下欠）	○		女	
28	左脛骨（上下欠）		○	女	27と一対
29	右距骨	○		女	
30	左大腿骨		○	男	全長43cm（身長162.1cm）
31	右大腿骨（下端欠）	○		男	30と一対
32	左脛骨（上下欠）		○	男	
33	右脛骨（上下欠）	○		男	

第２－１表　筆ノ尾第1横穴出土人骨部位別一覧表

骨　名	採取No.	部　　位	推定性別	推定年齢
頭 蓋 骨	16	顔面下半部欠，頭蓋底面欠，他は完形 頭蓋冠縫合：冠状縫合；0 矢状縫合；頭頂部２～４，孔間部２～４， 後　部０～２ 人字縫合；0	♀	壮 年 後 期 (30代後半)
	17	右顔面，右側頭部と右頭頂部の一部，右上顎骨 ○○ 歯牙　×７６×××××| 口蓋縫合：切歯縫合；(＋)	♂	壮 年 前 期 (20代後半)
	18	頭頂部～後頭部，右眼窩部 右前頭部と右側頭部 頭蓋冠縫合：矢状縫合；孔間部，後頭部２～３	♀	壮 年 中 期 (30 代)
	3	左下顎骨（下顎枝欠） 歯牙　|×××××６７８ ○○△ ×：死後欠　△：埋伏歯 ○：釘植歯	♀(?)	壮　　年

第２－２表　筆ノ尾第1横穴出土人骨部位別一覧表

骨　名	採取No.	部位別 右	部位別 左	部位別 不明	部　　位	推定性別	推定年齢
上 腕 骨	1			○	下端部の一部	♀(?)	
	2		○(?)		骨体上半部の一部	不詳	
	7			○	骨体中央部	♀(?)	
	22			○	骨体中央部	♂(?)	
	24	○			骨体中央部	♀	
寛　　骨	12		○		腸骨：寛骨臼窩，仙腸関節，大坐骨切痕	♂	同一個体
	14	○			腸骨：仙腸関節部	♂(?)	(?)
大 腿 骨	4			○	骨体中央部	♀(?)	
	8	○			下端部一部欠，405㎜	♀	
	13	○			上端部一部欠，435㎜	♂	同一個体
	15		○		ほぼ完形（下端部一部欠），440㎜	♂	(?)
	21		○		骨体中央部	♀	同一個体
	25	○			ほぼ完形，391㎜	♀	(?)
	30		○		上部折損，下端部一部欠，430㎜	♂	同一個体
	31	○			下半分欠	♂	(?)
脛　　骨	5	○			骨体の一部	♀	
	6		○		下端欠	♂	

骨　名	採取No.	部位別			部　　位	推定性別	推定年齢
		右	左	不明			
脛　骨	19		○		上，下欠	♀(?)	
	20		○		骨体の一部	♀(?)	
	23		○		下端部欠	♀	同一個体(?)
	26			○	骨体の一部	♀	
	27	○			下端部欠	♀	同一個体(?)
	28		○		上端部一部欠，下端部欠	♀	
	32		○		上，下欠	♂	同一個体(?)
	33	○			上，下欠	♂	
腓　骨	9	○			骨体中央部	♀(?)	
	10		○		骨体中央部	♀(?)	
	11	○			骨体中央部	♂(?)	
距　骨	29	○			ほぼ完形	♀(?)	

第３表　各骨の遺残個数からの推定個体数と性別

骨　名	個　数	部　位			個　体　数	性　　別	
		右	左	不明			
頭蓋骨	3				3	♂1	♀2
下顎骨	1				1		♀(?)1
上腕骨	5	1	1(?)3		3＋α(?)	♂1	♀2
寛　骨	2				1	♂1	
大腿骨	8	4	3	1	4＋α(?)	♂2	♀2＋α(?)
脛　骨	10	3	6	1	6＋α(?)	♂2	♀2＋2(?)
腓　骨	3	2	1		2	♂(?)1	♀(?)1
距　骨	1	1			1		♀(?)1

第４表　各大腿骨長からの推定身長値

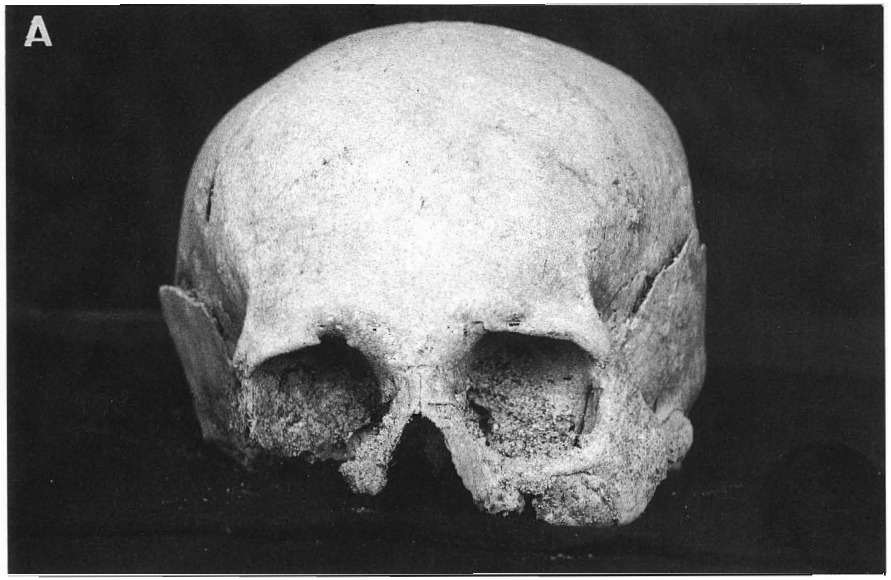
骨　名	採取No.	左　右	性　別	骨の計測値	推定身長		備　考
					藤井法	ピアソン法	
大腿骨	8	右	♀	405	151.8	143.8	
	13	右	♂	435	162.3	163.0	同一個体(?)
	15	左	♂	440	163.6	164.0	
	25	右	♀(?)	391	148.6	141.4	
	30	左	♂	430	161.1	162.1	

第５表　関東と山陰（筆ノ尾１号穴）の古墳時代人の身長比較

		男　性		女　性	
		藤井法	ピアソン法	藤井法	ピアソン法
関東地方人		163.1	163.6	151.5	143.5
筆ノ尾	採取No.13・15	163.0	163.5		
第１号穴出土人骨	30	161.1	162.1		
	8			151.8	143.8
	25			148.6	141.4

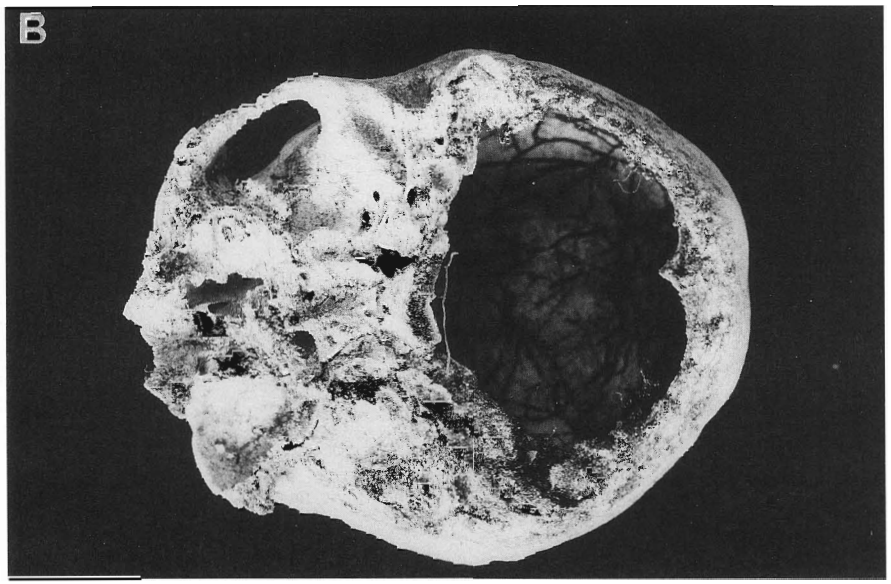
第６表　頭蓋骨♀（No.16）の計測値

マルチンNo.	計測項目	計測値
1	頭骨最大長	174.0
8	頭骨最大幅	137.0
8／1	頭蓋長幅示数	0.78
9	最小前頭幅	85.8
10	最大前頭幅	100.3
11	両耳幅	106.5
12	最大後頭幅	98.7
43	上顔幅	96.5
44	両眼窩幅	88.5
50	前眼窩間幅	21.0
51	眼窩幅	左 34.0
		右 35.5
52	眼窩高	左 32.8
		右（－）
52／51	眼窩示数	左 0.96

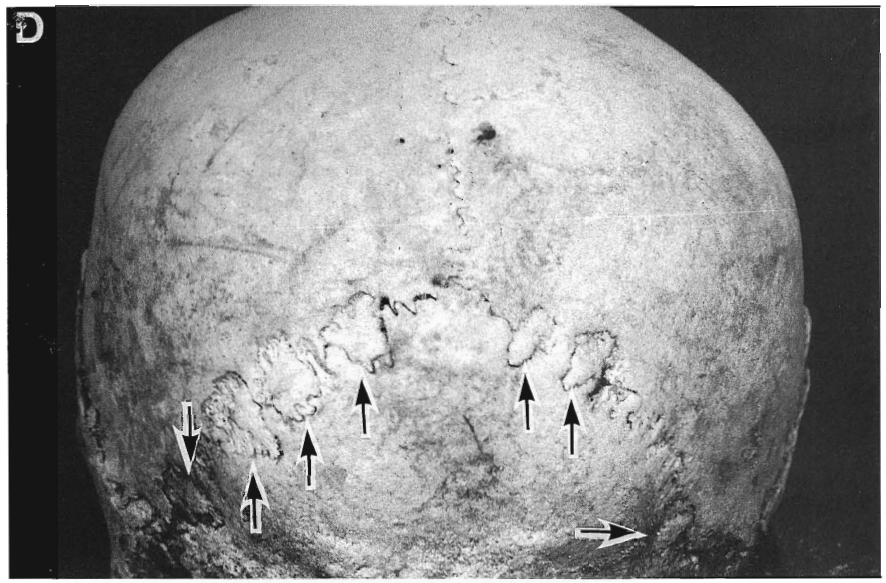


頭蓋骨正面

右側頭面

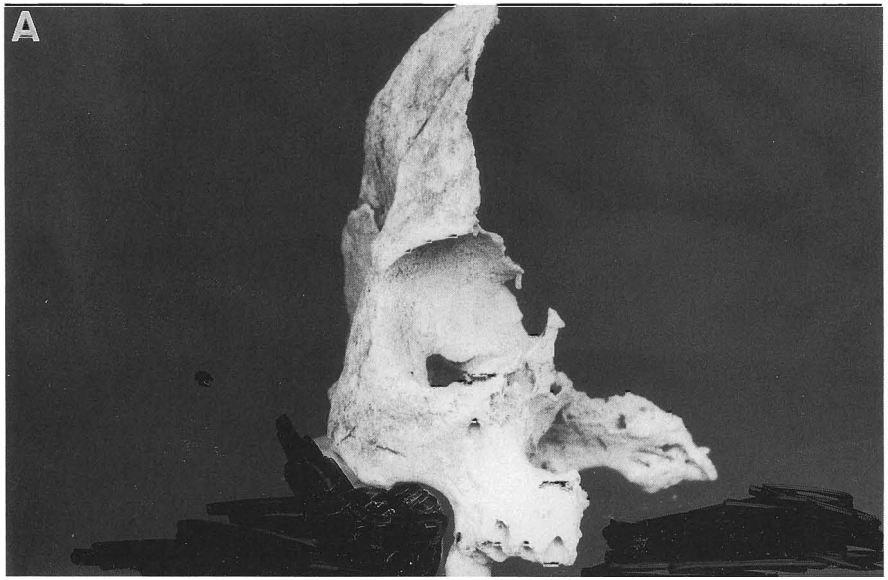


頭蓋底面

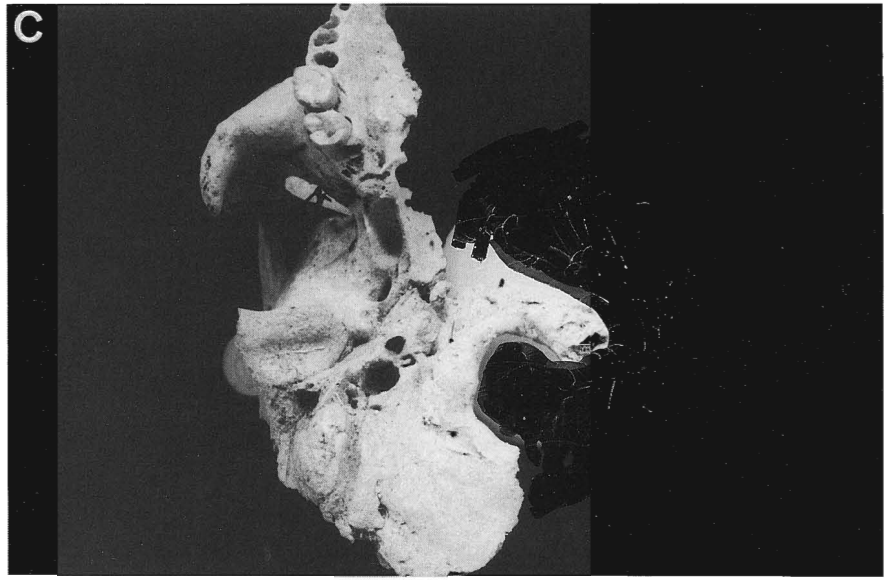


後頭面　矢印:インカ骨

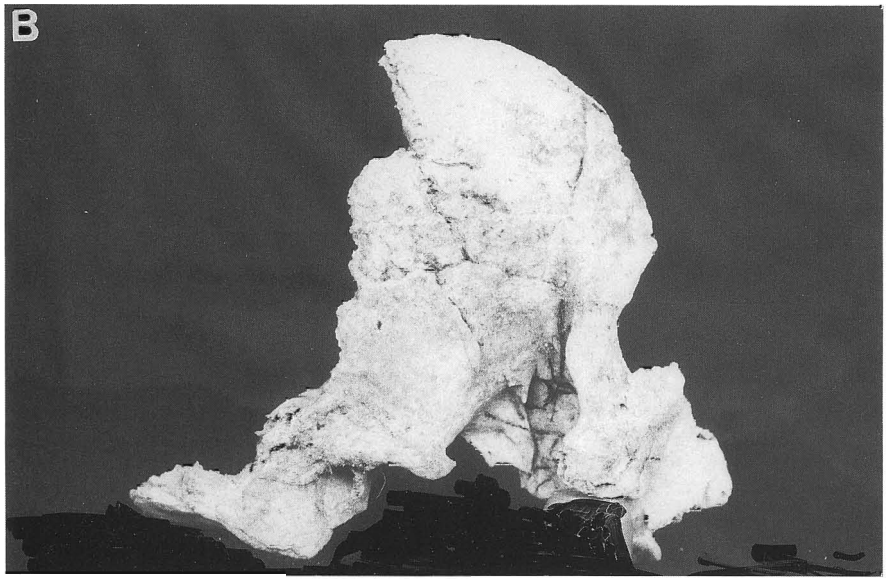
1. 頭蓋骨(No.16)



頭蓋骨正面



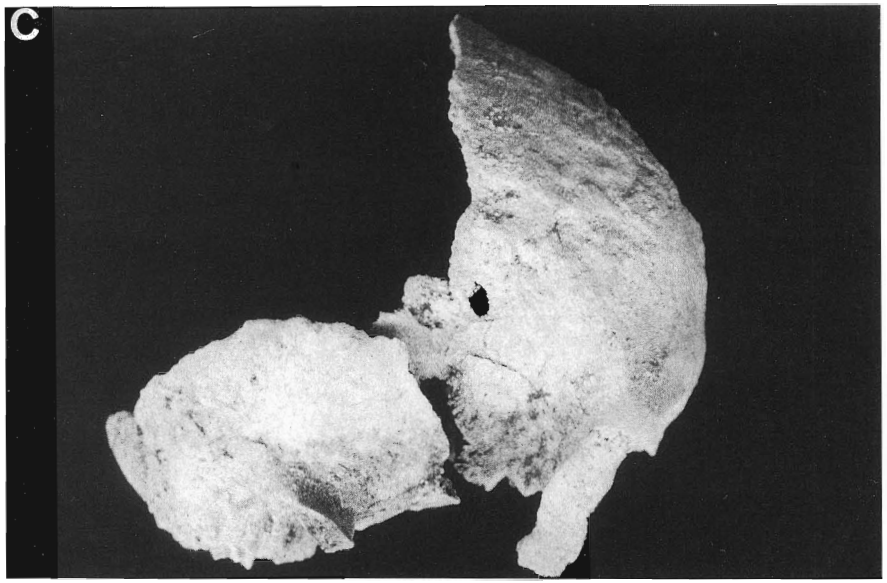
頭蓋底面



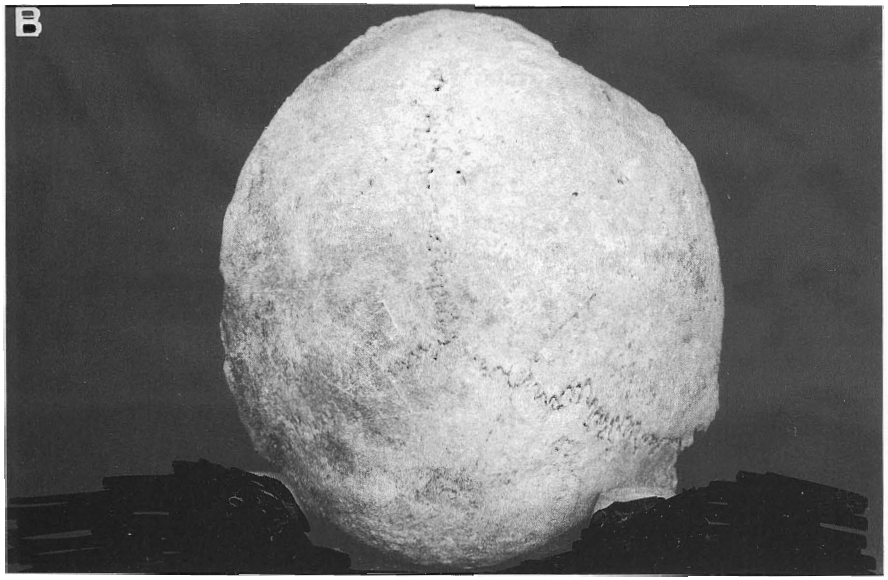
右側頭面

2. 頭蓋骨(No.17)

頭蓋骨正面

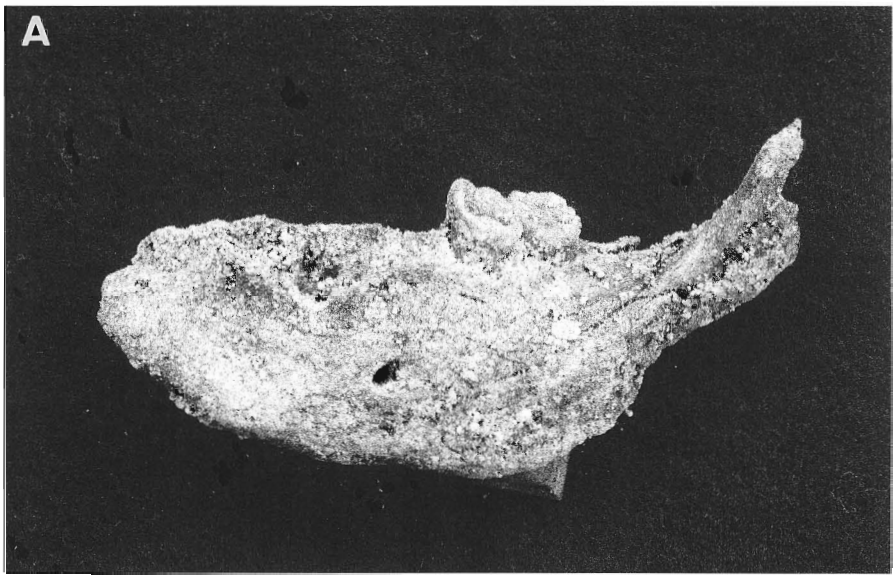


右側頭面



後頭面

3. 頭蓋骨(No.18)



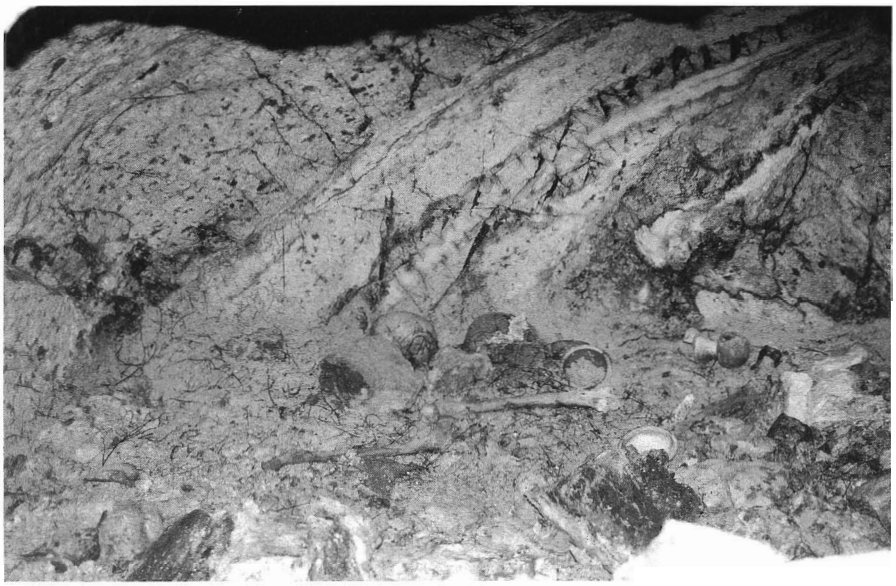
左下顎骨

4. 下顎骨(No.3)

筆ノ尾横穴群遠景(南から)

筆ノ尾1号穴　羨門の閉塞状況

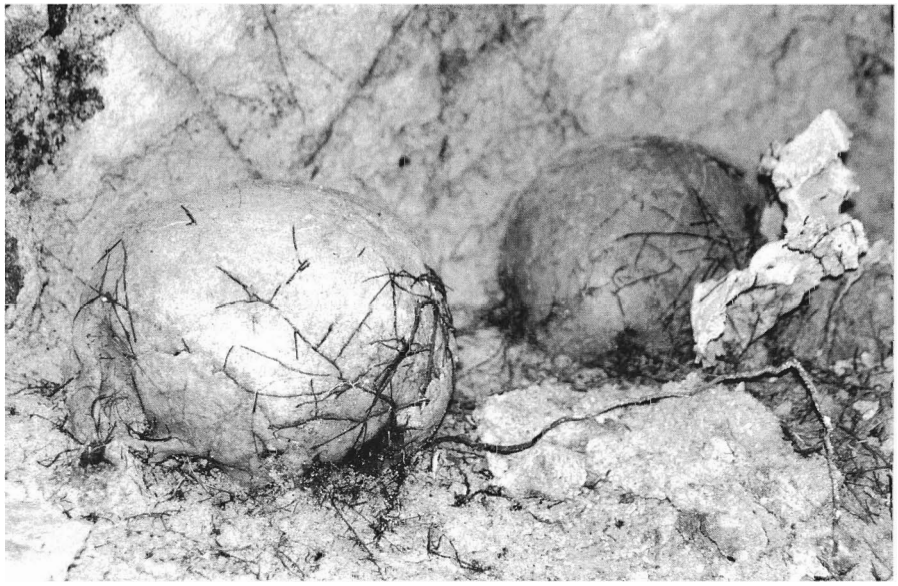
図版 2



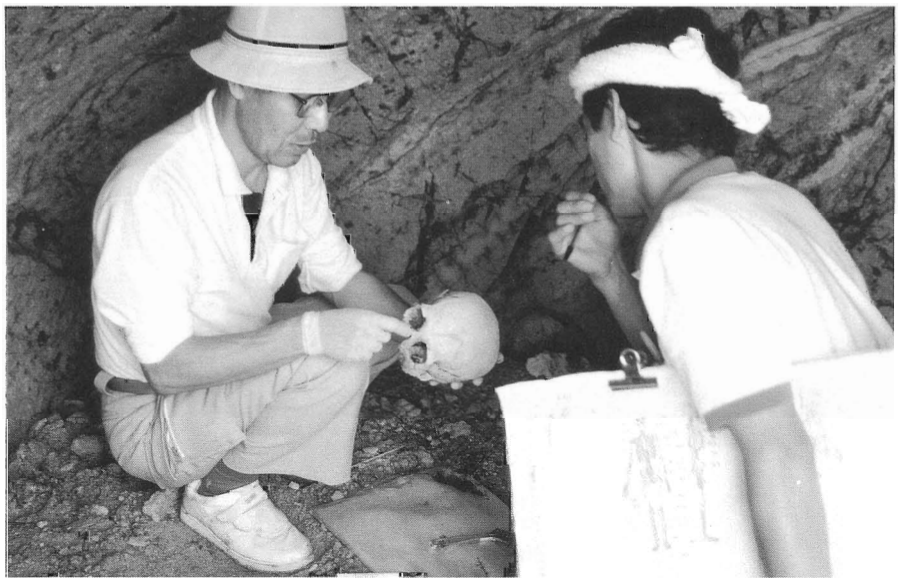
筆ノ尾1号穴
玄室の状況

筆ノ尾1号穴
玄室床面の状況

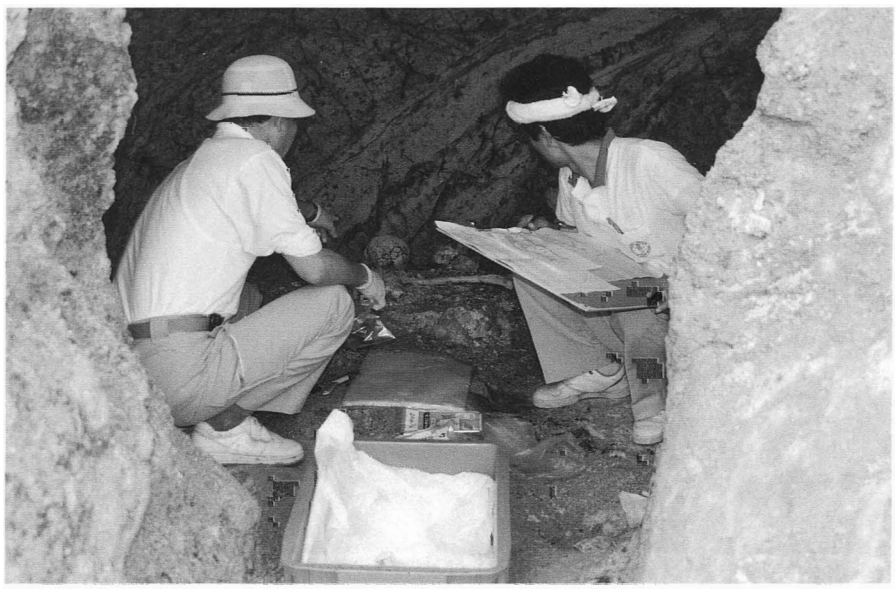
筆ノ尾1号穴
奥壁付近の頭骨(1)



筆ノ尾1号穴
奥壁付近の頭骨(2)

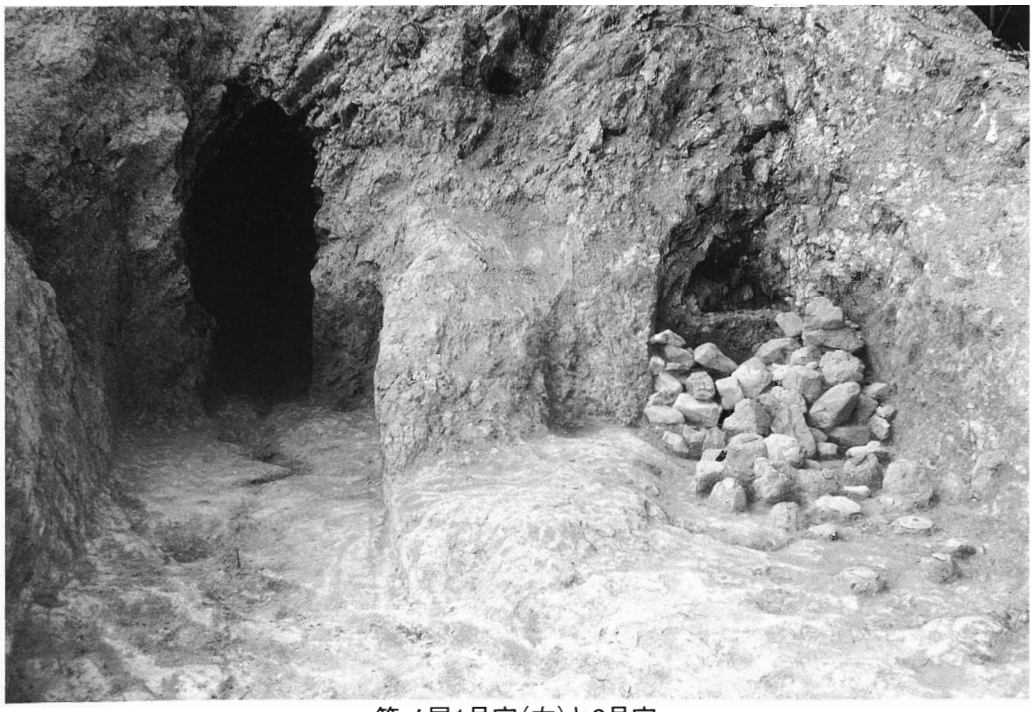


筆ノ尾1号穴
人骨の取り上げ(1)



筆ノ尾1号穴
人骨の取り上げ(2)

図版 4

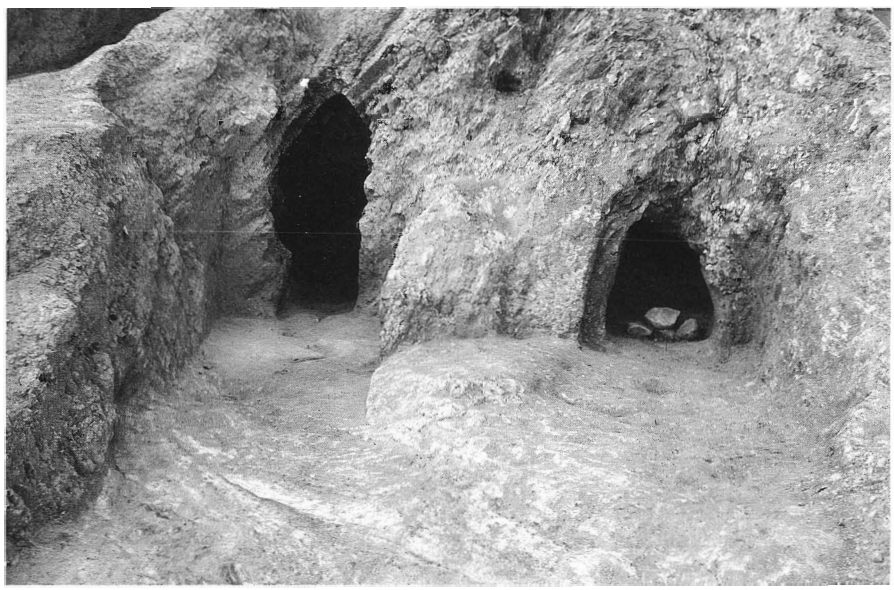


筆ノ尾1号穴(左)と2号穴

筆ノ尾2号穴　羨門の閉塞状況

筆ノ尾2号穴
玄室内の状況

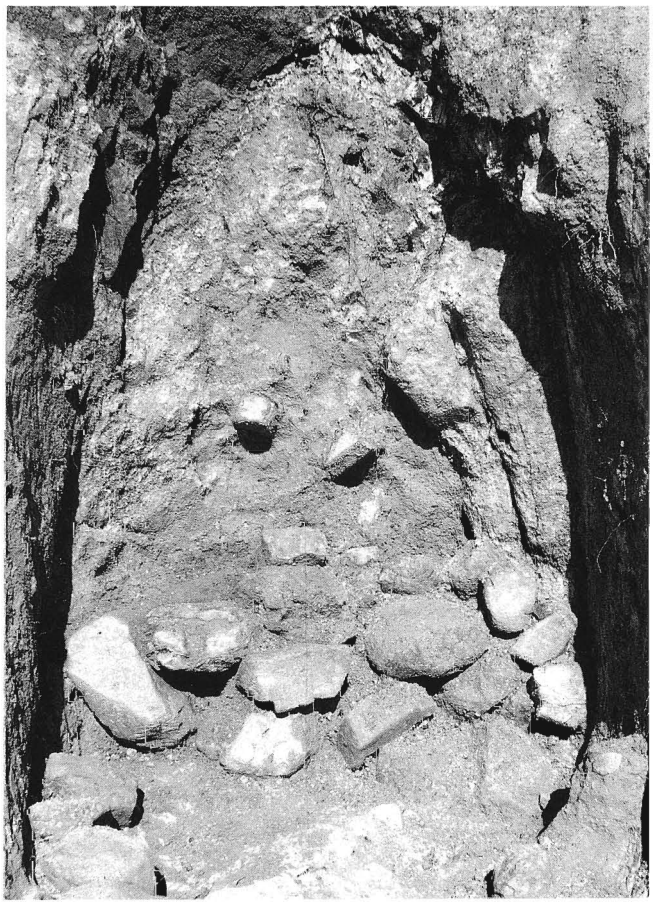
筆ノ尾2号穴
玄室床面の状況



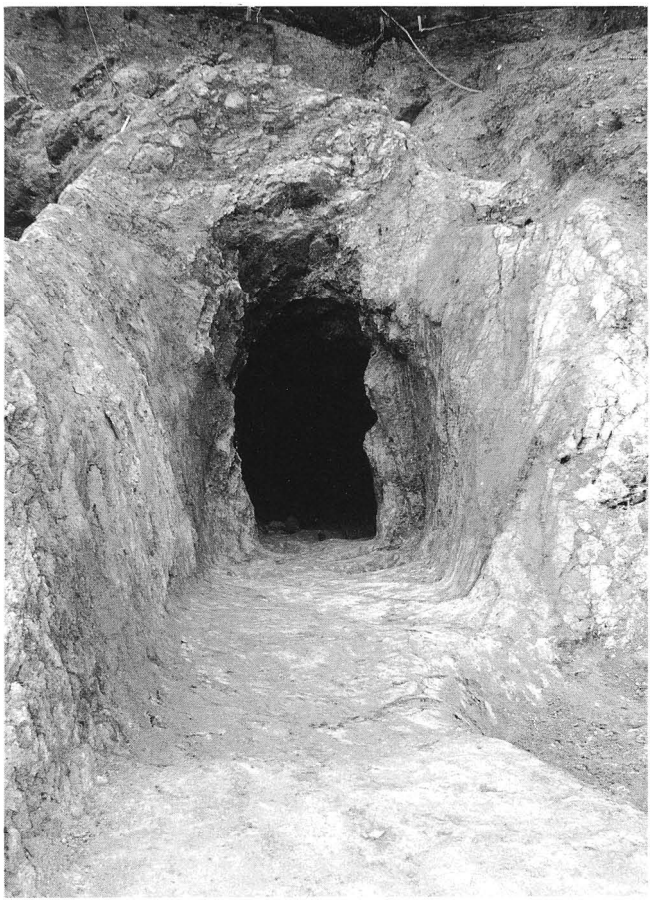
筆ノ尾1号穴(左)と2号穴

図版 6

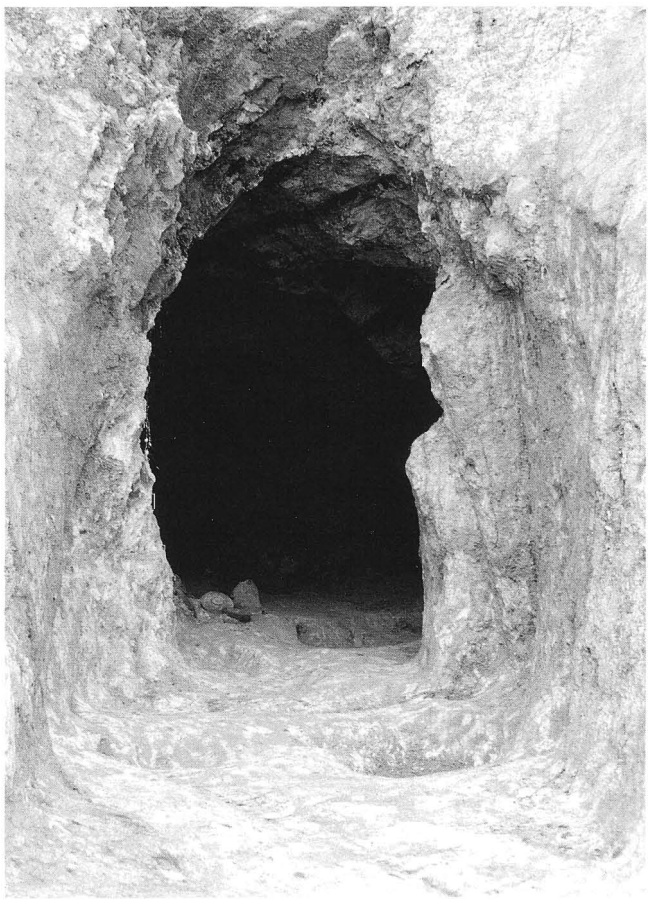
筆ノ尾3号穴　前庭部～羨門の閉塞状況



筆ノ尾3号穴　羨門の閉塞状況



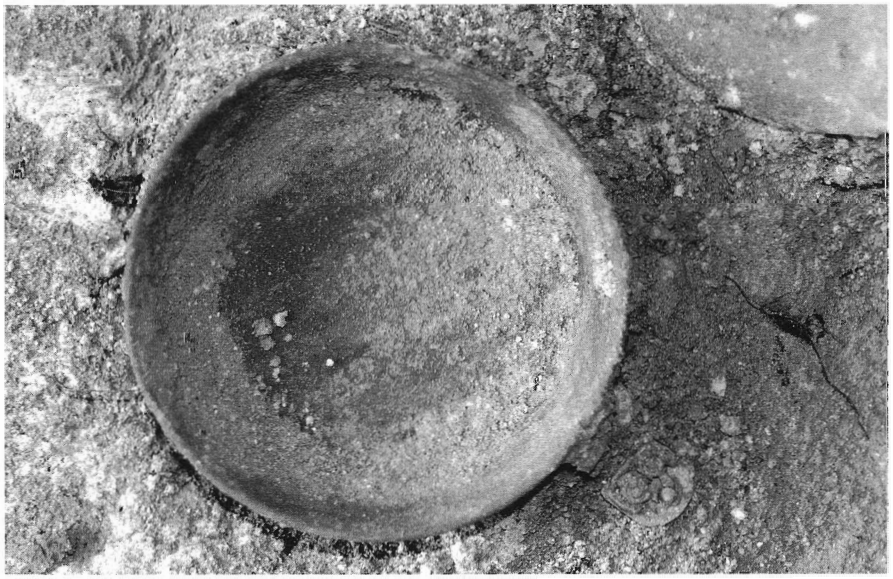
筆ノ尾3号穴　前庭部～羨門



筆ノ尾3号穴　羨門

図版 8

筆ノ尾3号穴
玄室の状況



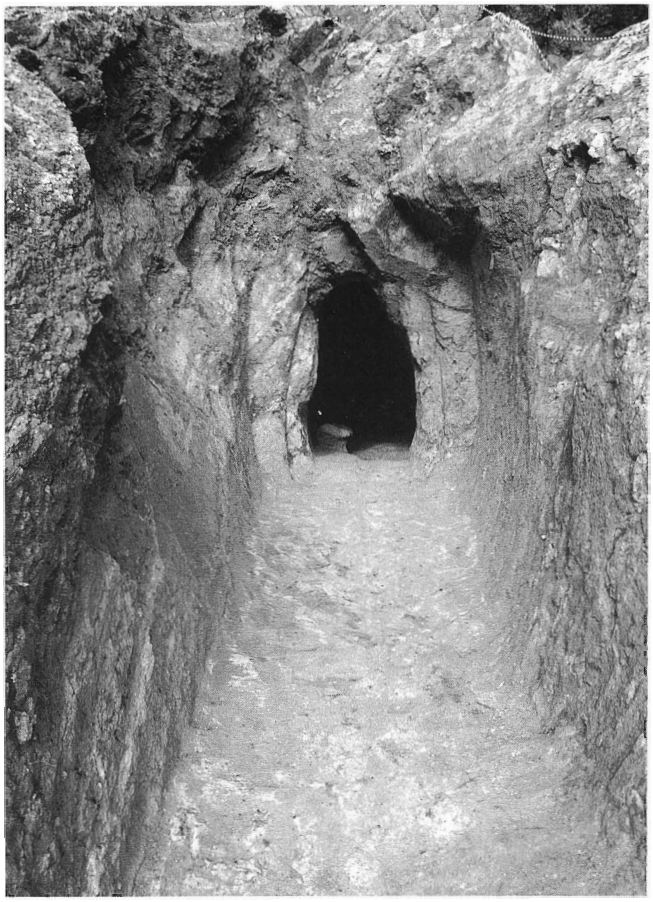
筆ノ尾3号穴
銅製金具(1)

筆ノ尾3号穴
銅製金具(2)

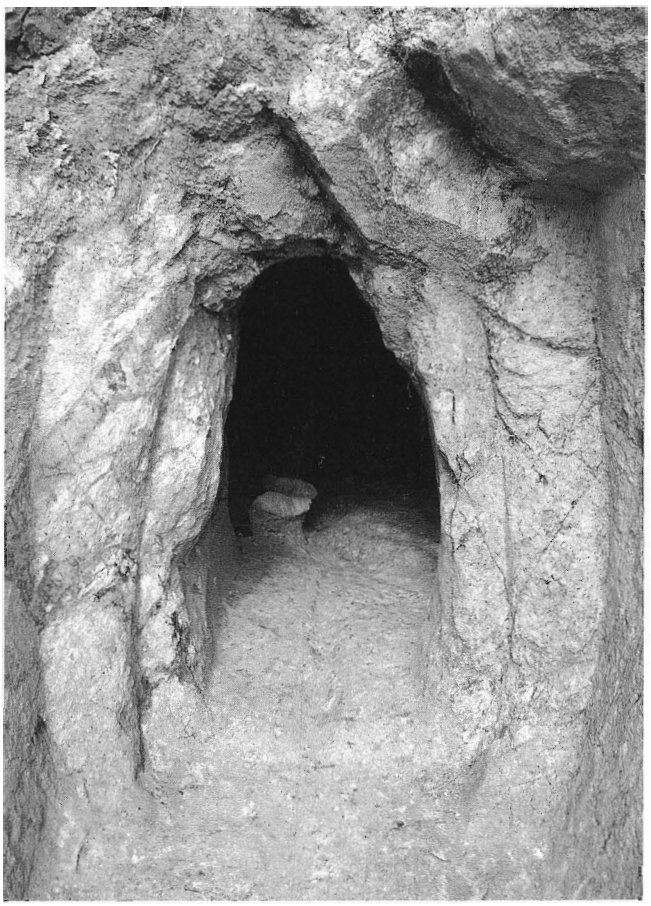
筆ノ尾4号穴　前庭部～羨門の閉塞状況

筆ノ尾4号穴　羨門の閉塞状況

図版10



筆ノ尾4号穴　前庭部～羨門



筆ノ尾4号穴　羨門

筆ノ尾4号穴
玄室の状況(1)

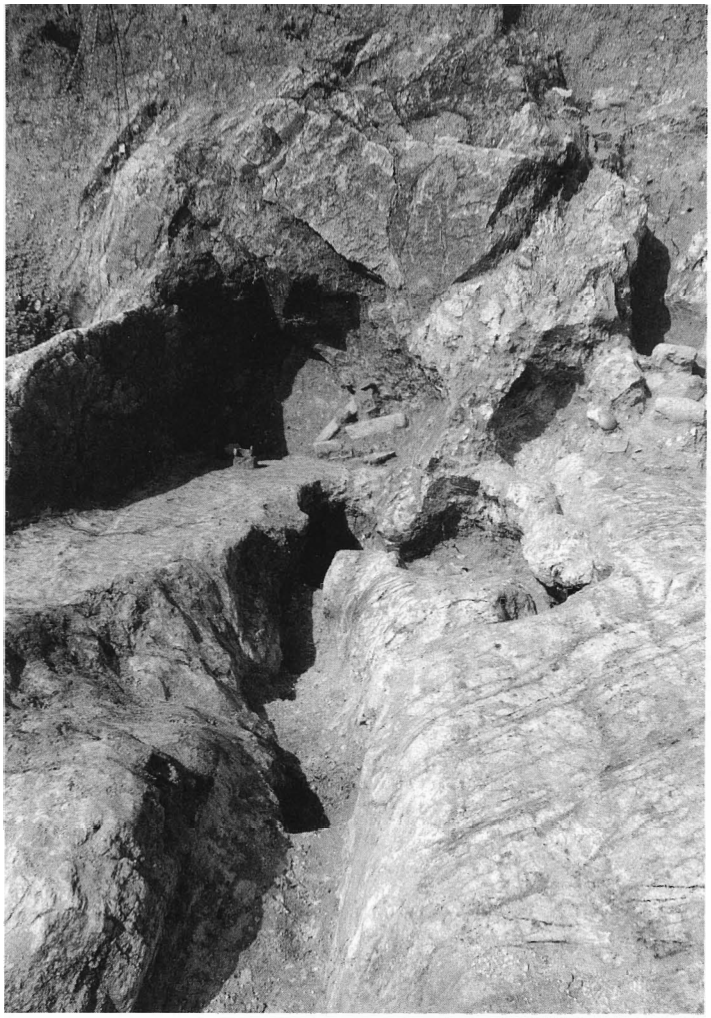
筆ノ尾4号穴
玄室の状況(2)

筆ノ尾4号穴
玄室右側の須恵器床

図版12

筆ノ尾4号穴　玄室奥壁の須恵器群(1)

筆ノ尾4号穴　玄室奥壁の須恵器群(2)



筆ノ尾5号穴　前庭部～羨門の閉塞状況

筆ノ尾5号穴　羨門の閉塞状況

図版14

筆ノ尾6号穴　前庭部～羨門の閉塞状況

筆ノ尾6号穴　羨門の閉塞状況

調査中の筆ノ尾横穴群(東から見る)

調査中の筆ノ尾横穴群(南から見る)

図版16

筆ノ尾5号穴(左)と6号穴
(南から見る)

同　上(西から見る)

同　上(北から見る)

筆ノ尾5号穴　羨門(南から見る)

筆ノ尾5号穴　玄室全景(1)

図版18

筆ノ尾5号穴　玄室全景(2)

筆ノ尾5号穴　玄室(南から見る)

筆ノ尾6号穴　羨門(南から見る)

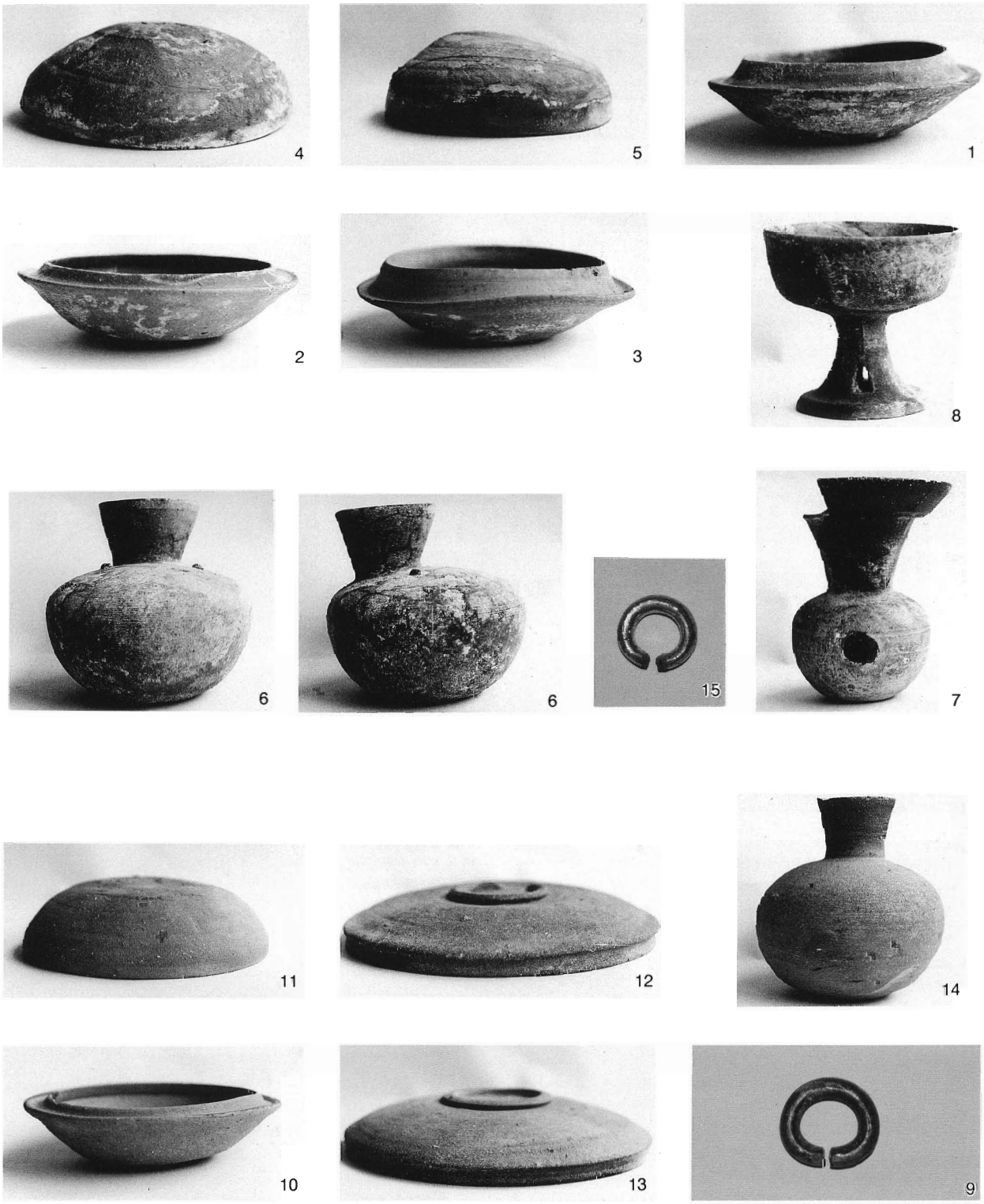
筆ノ尾6号穴　玄室全景

図版20

筆ノ尾6号穴
玄室(北から見る)

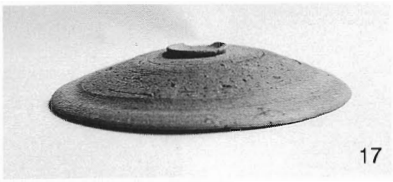
筆ノ尾6号穴
赤色塗彩土器(1)

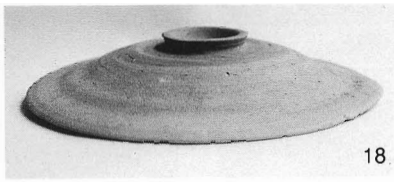
筆ノ尾6号穴
赤色塗彩土器(2)



筆ノ尾1号穴　出土遺物

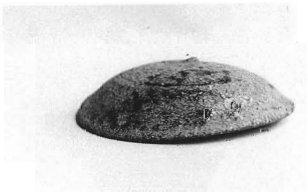
図版22

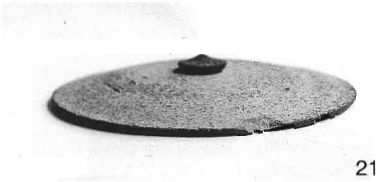

17


18

16

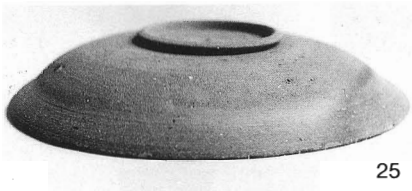
19

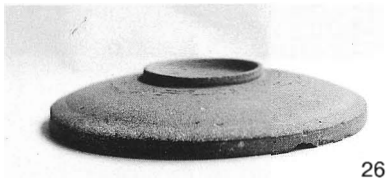

20

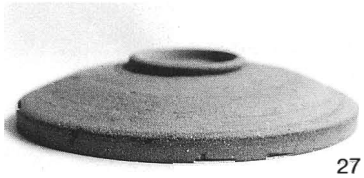

21

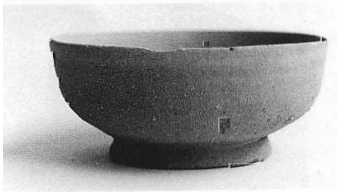
22

筆ノ尾2号穴　出土遺物

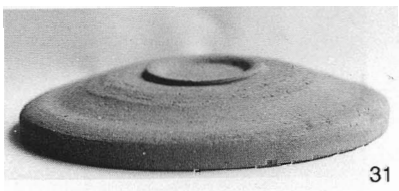

25

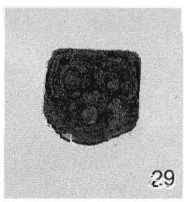

26

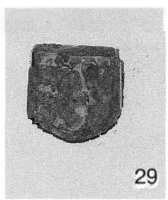

27

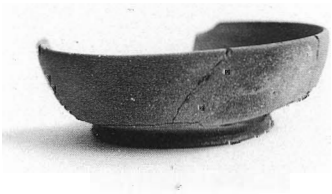

23

24


31


29


29


30

28

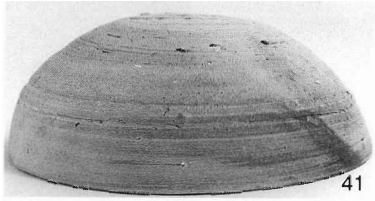
筆ノ尾3号穴　出土遺物

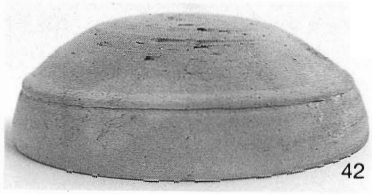
37

38

39

40


41


42

32

33

34

35

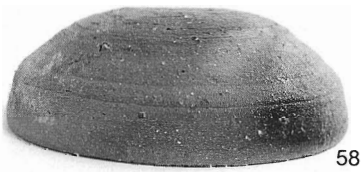
36

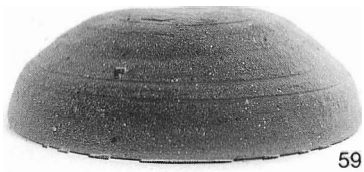
54

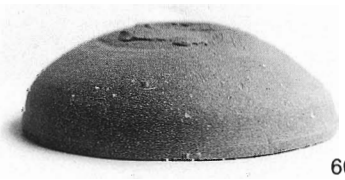
55

56

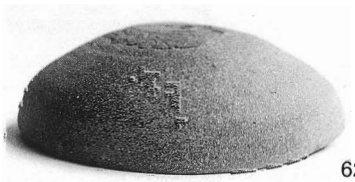
57


58


59

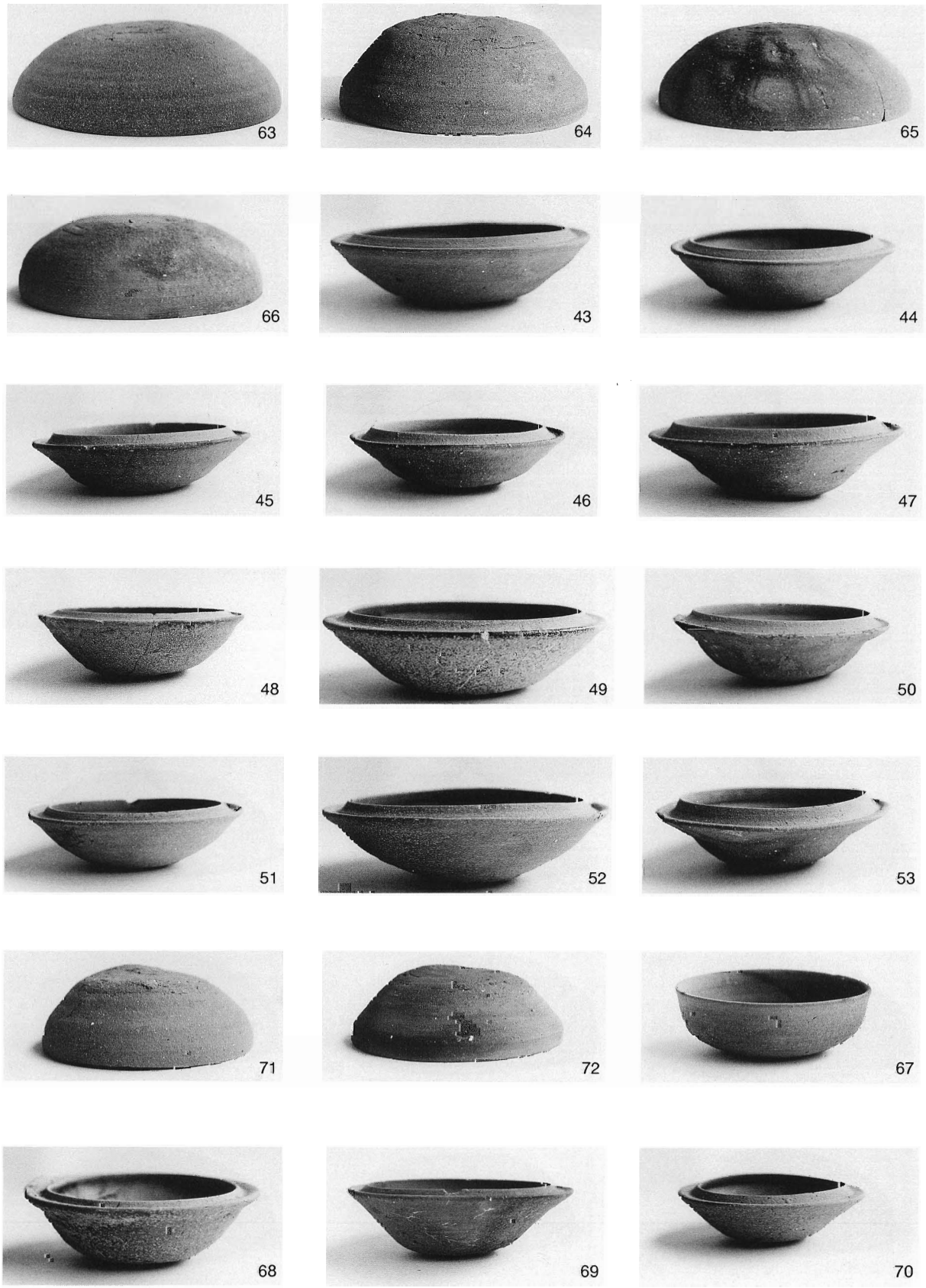

60

61


62

筆ノ尾4号穴　出土遺物(1)

図版24



筆ノ尾4号穴　出土遺物(2)

73

74

75

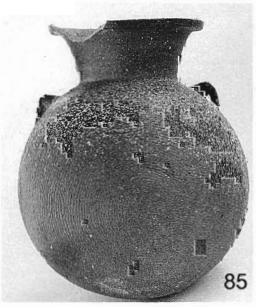
76

77

78

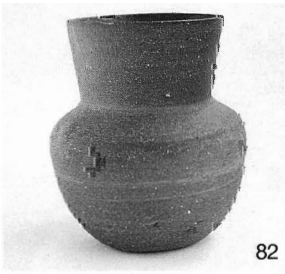
79

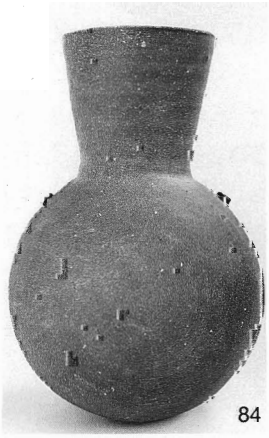
80

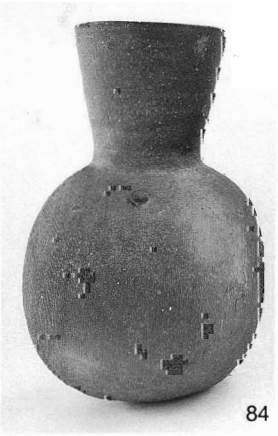

85

85

81


82


84


84

83

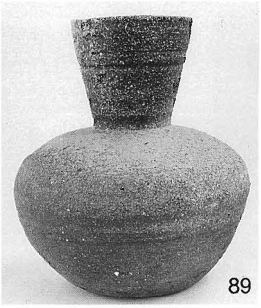
83

筆ノ尾4号穴　出土遺物(3)

図版26

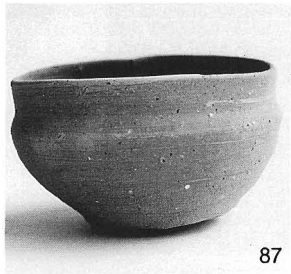
86

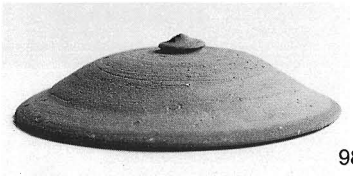
86


89

88

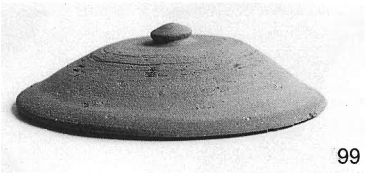
90


87


98

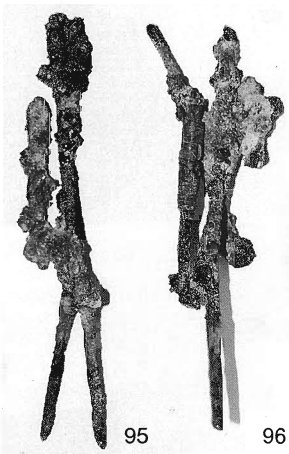
91

92


99

94

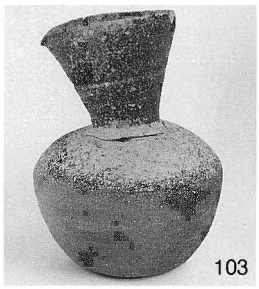
93

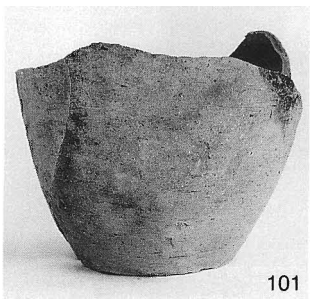

95 96

100

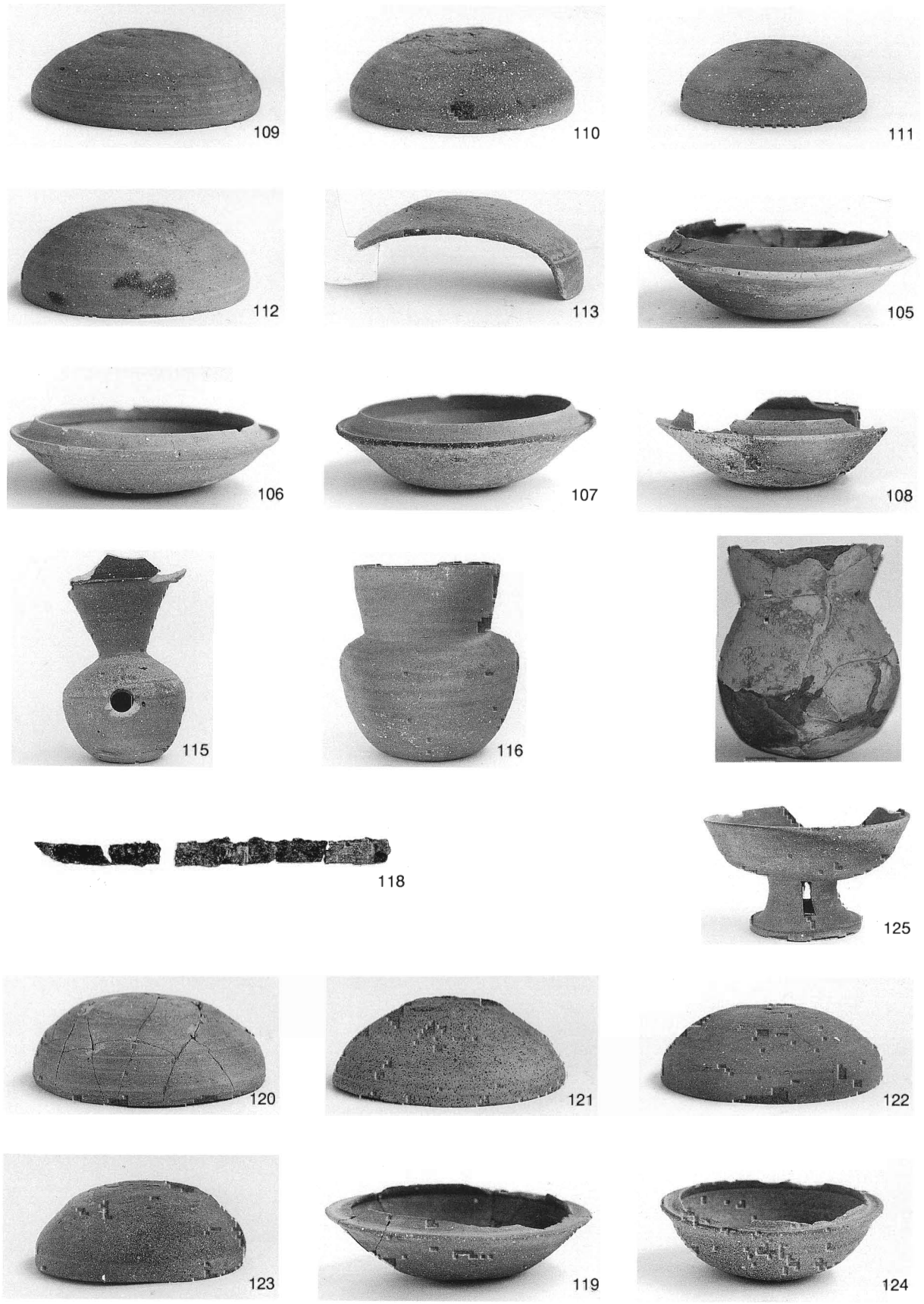
97

102


103


101

筆ノ尾4号穴　出土遺物(4)


109
110
111
112
113
105
106
107
108
115
116
118
125
120
121
122
123
119
124

筆ノ尾6号穴　出土遺物

筆ノ尾横穴群発掘調査報告書

1995年1月

発行　松江市教育委員会
㈶松江市教育文化振興事業団

印刷　有限会社　谷口印刷
松江市母衣町89